

第二 講座の沿革

一 哲學科

哲學哲學史第一講座（哲學）

本講座は明治三十九年九月文科大學哲學科の創設とともに開設され、桑木殿翼教授が本講座を擔任することとなり、哲學概論と西洋哲學史とを擔當した。當時哲學と哲學史は現在のように分離していなかつたのである。ついで



桑木教授

翌四十年、桑木教授が歐洲留學の途にのぼつたので、朝永三十郎助教授が同年七月來任して西洋哲學史を講じたが、四十二年歸國した桑木教授に代つて、三年間ドイツに留學した。さらに四十三年八月には、西田幾多郎助教授が倫理學講座所屬として來任し、以後哲學概論は同助教授が倫理學を兼ねて講ずることとなつた。特殊講義の内容は多くドイツ觀念論に關係し、演習のテキストもまたカント、フイヒテ、ヘーゲルなどのドイツ觀念論のものが講讀された。西田助教授は大正二年八月教授に昇任、宗教學講座擔任となつたため、同年の哲學概論は桑木教授が講じた。し

かし、翌年桑木教授は東京帝國大學に轉任したので、西田教授は宗教學講座から轉じて本講座を擔當することとなつた。この年から田邊元助教授が來任する大正八年八月まで、齋藤唯信講師が大正四年度に佛教教理概論を普通講

義において講じたほかは、普通講義・特殊講義・演習ともに西田教授一人の手によつてなされていた。演習においては、従来のドイツ観念論哲學關係のものほかに、ベルグソン、ライプニッツ、スピノザ、フッサール、アリストテレスなどの諸種のテキストが広く用いられ、また特殊講義において、『自覺に於ける直觀と反省』（大六）に述べられる思想が講述されることから、次第に西田教授独自の哲學體系が組織されるようになった。田邊助教授も來任後、特殊講義と演習とをもつて西田教授を助けていたが、西田教授はまた概論（普通講義）と演習を擔當するほかに特殊講義において「藝術的意識」（大八）、「意識の問題」（大一一）、「宗教の哲學的基礎」（大一一五）などの諸種の問題を講じ、昭和三年「哲學の窮極問題解決の一企圖」という特殊講義を最後として、同年九月停年により退官した。

田邊助教授はその前年、昭和二年十一月教授に昇任、西田教授退官のあとをうけて本講座を主宰することとなつた。田邊教授は概論のほかに特殊講義において、「心身關係論」（昭五）、「世界圖式の構造」（昭七）、「認識・存在・行爲」（昭八）、「歴史的時空間」（昭二三）、「世界の論理的構造」（昭一七前）、「絶對知」（昭一七後）など多くの問題を獨自な獨創的思索によつて講義し、西田哲學に雁行して自己の體系の樹立に努力した。さらに久松眞一、高坂正顯、高山岩男、土井虎賀壽、下村寅太郎の諸講師も、また相ついで自己の得意とする研究を特殊講義において講じた。田邊教授の演習にはシェリング「ブルーノ」のほかに、ヘーゲルのテキストが講讀されたが、中でもヘーゲルの「精神現象論」は、昭和八年から教授退官の年まで十二年間にわたり、嚴密精到に考究講讀された。昭和十三年三月には高山岩男講師が助教授に任せられ、以後田邊教授を助けていたが、教授は昭和二十年三月「懺悔道」の講義を最後に停年退官した。

太平洋戦争は、戦時中および戦後を通じ本講座および哲學界に深刻な影響を及ぼし、昭和二十一年三月助教授から昇任した高山教授は、「學部の歴史」に述べられたような事情によつてその年八月退官し、代つて山内得立教授

が、哲學哲學史第五講座（西洋哲學史）から轉じて、本講座を擔當することとなつた。山内教授は哲學概論のほか、研究において「即の論理」（昭二二）、「アリストテレスの論理」（昭二三）、「象徴の論理」（昭二四）など論理の問題を講じ、大島康正講師また自由の問題および存在論の問題を講じた。山内教授の演習においては、「哲學の諸問題」なる題目のもとに、古代からハイデッガー、ヤスパースに至る哲學主要著作の解説と報告が學生によつてなされ、それについての批評と討論が行われた。またトマスの「スンマ・テオロジカ」が毎年講讀され、二十六年「哲學の諸問題」終了後は、カント、フッサールのものが讀まれ、大島講師は二十六年東京文理科大学に轉出するまでヘーゲルの「精神現象論」を講じていた。

なお特記すべきことは、昭和二十二年以降、演習にギリシア語・ラテン語が設けられ、哲學專攻學生の履修すべき必須の課目とされ、それによつて學生の古代および中世哲學研究が、大いに促進刺戟されるようになったことである。

このように新たな發展と清新の氣が戦後の本講座にも動き始めたのであるが、講義において「形式の哲學」（昭二五）、「Logonomie, Autonomie, Heatonomie」（昭二六）、「哲學の論理と論理の哲學」（昭二八）、また研究において「第四の論理」、「第五の論理」などを講じていた山内教授は、二十八年四月停年退官し、翌年四月三宅剛一教授が東北大学から轉じて本講座を擔任することとなつた。

三宅教授は哲學概論のほかに、研究において「歴史存在論」（昭二九）、「人間存在論」（昭三〇・三一）を講じて現在に及び、演習においてはカントのほかに、ヒューム、フッサールが講讀されている。また近年は下村寅太郎、上田泰治、今田恵、山元一郎、伊藤誠、近藤洋逸、澤瀉久敬、齋藤信治、平下欣一、三村勉、森口美都男、辻村公一の諸講師が、それぞれ演習あるいは特殊な題目についての講義をなし、學生を指導している。なお伊藤講師によつて二十六・二十八の兩年にわたつて行われた記號論理學の講義は、わが國大學の哲學科におけるこの種テーマにつ

いての初めての講義であろう。

以上のように本講座は創設以來桑木、西田、田邊、高山、山内、三宅と、すでに六代の主任教授の時代を経て現在に至っているが、その間の各教授の活躍は、それぞれが國の學界・思想界における代表的存在として、その時代の文化の一指針であつたといつても過言でない。まず初代桑木教授は、本學就任當時、すでに『哲學概論』(明三三)、『西洋哲學史要』(明三五)、『デカルト』(明三七)、『哲學五流辯』(明三九)などの著者として知られ、東京大學の形而上學的世界觀を中心とする學風に對し、西洋哲學の流れを汲み批判哲學をその立場とする、新しい學風を代表



西田教授

する學者であつたが、カントに親炙し、ことに本學在任中の歐洲留學において、新カント學派の影響を受けて傳えた學風は、大正期におけるわが國の哲學界を大きく支配したものととして特筆すべきである。教授は在任期間僅かにして東京帝國大學に去つたが、本學在任中の著書としては『哲學綱要』(大元)、『現代の價值』(大二)、『現代思潮十講』(大二)があり、その後のものとして『カントと現代の哲學』(大六)、『文化と改造』(大一一)などがある。

つぎに西田幾多郎教授の獨創的な學風は、いわゆる西田哲學として知られ、改めてここに言を贅する必要もないが、その立場は、初著『善の研究』(明四四)においてすでに現われている根本信條としての純粹經驗の立場を徹底發展させたものであり、その主客未分の根源的經驗は『自覺に於ける直觀と反省』(大六)において、フイヒテ、ベルグソンを介して絶對自由の意志の説となり、『意識の問題』(大九)、『藝術と道徳』(大一一)においては、その立場から知情意の問題が反省され、さらに『働くものから見るものへ』(昭二)においては、宗教的自覺の問題を通して、主意主義から一種の直觀主義に轉じ、教授の思索の根幹ともいふべき「場所」の思想に到達し、すべてのもの

の根柢に「見るものなくして見」、「姿なき姿」を考ふる絶対無の立場が、教授の哲學の究極的な原理として自覺されてくる。このように教授の哲學は、東洋的な思索を西洋哲學の反省を通じて、独自の體系により把握しようとするものであり、昭和三年退官後も『一般者の自覺的體系』（昭五）、『無の自覺的限定』（昭七）、『哲學の根本問題』（昭八）、『哲學の根本問題續篇』（昭九）、『哲學論文集第一—第七』（昭一〇—一二）、『續思索と體驗』（昭一二）、『續思索と體驗以後』（昭二三）によつて、まれにみるその獨創的な哲學體系を確立した。それらの著作はすべて『西田幾多郎全集』（全十卷・別卷六卷）に收められており、昭和二十年六月鎌倉にて逝去後も、關係者によつて「寸心會」

が組織され、毎年追悼公開講演會が開かれ、その遺徳が偲ばれている。



田邊教授

田邊元教授は、大正八年助教として來任以前、すでに『最近の自然科學』（大四）、『科學概論』（大七）の著があり、その後西田教授の直觀主義に影響されて『數理哲學研究』（大一一）を著わし、大正十一年から二か年の歐洲留學をへて、『カントの目的論』（大一一三）、『ヘーゲル哲學と辯證法』（昭七）において具體的現實の把握を試み、『哲學通論』（昭八）においては論理的自覺を通しての絶対辯證法を主張、さらに「社會存在

の論理」以後の數篇の論文においては、教授の哲學に田邊哲學の名稱を冠せられる所以ともなつた「種の論理」を提唱するに至つた。その後『科學と哲學との間』（昭一二）、『正法眼藏の哲學的私觀』（昭一四）、『歴史的現實』（昭一五）などの著作を發表、昭和二十年三月退官後も、『懺悔道としての哲學』（昭二二）において、理性批判の歸結としての絶対批判を通して、他力的宗教への歸入を説いた。その後も教授の學究的意欲はいささかも倦むところを知らず、輕井澤の山莊における孤獨な環境の下に著わされた、『種の論理の辯證法』（昭二二）、『實存と愛と實踐』（昭二二）、『キリスト教の辯證』（昭二三）、『哲學入門』（昭二四、二五）、『ヴァレリーの藝術』（昭二六）などにより、

廣く大きな影響を及ぼした。さらに近時はその圓熟した體系思想の上に立つて、ふたたび初期の問題に立ち歸り『數理の歴史主義展開』(昭三〇)、『理論物理學新方法提說』(昭三〇)、『相對性理論の辯證法』(昭三〇)などをつぎつぎと發表している。なお昭和二十五年には、多年にわたる學界への功績に對して文化勳章が授けられた。

高山岩男教授は、西田哲學を繼承するいわゆる京都學派を代表する學者の一人であり、その在任中の著書には、『西田哲學』(昭一〇)、『哲學的人間學』(昭一三)、『續西田哲學』(昭一五)、『文化類型學』(昭一四)、『文化類型學研究』(昭一六)、『世界史の哲學』(昭一七)などがあり、その學界・思想界に與えた影響は大きい。退官後も『文化國家の理念』(昭二一)、『哲學概說』(昭二五)、『論理學』(昭二七)、『場所的論理と呼應の原理』(昭二六)、『道德の危機と新倫理』(昭二七)、『宗教は何故必要か』(昭二八)、『現代の不安と宗教』(昭三〇)などを著わし、活躍をつづけている。



高山教授

山内得立教授は、すでに大正年間、西田教授のもとにおいて、リッケルトの「認識の對象」を翻譯し、その後大正九年から十二年にわたつての歐洲留學においては、フライブルグ大學においてフッサール教授から直接教えを受け、東京商科大學教授を経て本學に來任したのである。教授は『現象學敍說』(昭四)、『存在の現象形態』(昭五)、『體系と展相』(昭一二)などにおいて、フッサールの現象學を敍述し、あるいは現象學的觀點のもとに諸種の問題を展開し、從來新カント派の影響の強かつたわが國に、現象學を紹介した功績は大きい。本學においてはさきに西洋古代中世哲學史講座を擔當し、多年研鑽の成果は『人間のポリスの形成』(昭一三)、『ギリシヤの哲學』(昭一九・二二)、『存在論史』(昭二四)によつて發表されているが、本講座擔任以後は、その獨自な論理の展開のもとに、古來の哲學の問題を反省し、現代の實存の問題を把握しようとする努力した。それらは『實存の哲學』

〔昭二三〕『實存と所有』(昭二八)などの著書として現われつつある。また教授が就任と同時に、哲學專攻學生にギリシア語・ラテン語を必修させることとしたことはすでに述べたが、さらにその在任中、關西諸大學間の研究交流機關たる「關西哲學會」結成に努力し、二十六年五月その發會以來初代委員長として哲學の發展に盡力し、二十八年四月退官後も、京都學藝大學學長としての激務のかたわら、學會に對する着實な指導を續けている。

山内教授の後をうけて來任した三宅剛一教授は、『學の形成と自然的世界』(昭一五)、『數理哲學思想史』(昭二三)、『ハイデッガーの哲學』(昭二五)、『十九世紀哲學史』(昭二六)などの著者として知られ、また山内教授と同じくフライブルク大學においてフッサール、ハイデッガーに學んだ。來任後の教授は、その該博な學殖のもとに、現象學的な精密着實な考察を通して、あるいは歴史的存在論、または人間存在論の問題などについて講じつつ、廣汎な研究を進めており、その成果が期待される。また教授は就任以來學生および大學院學生の指導に意を注ぎ、關西哲學會の發會以來、ほとんど中絶されていた哲學・哲學史卒業生を中心とする「哲學茶話會」を復活し、銳意その善導を圖つている。この會は早く大正十二年「哲學・倫理學會」から獨立したもので、原則として毎月一回開き、專攻生の研究發表に對する批評討論が行われている。

「哲學茶話會」のほかには本講座に關係する學會には、別記の「京都哲學會」や、前述の「關西哲學會」および「日本哲學會」などがあり、それぞれに對しても本講座の貢獻するところ大である。また戦後は西洋哲學界との交渉もふたたび次第に活潑となり、すでに昭和二十六年・三十年の二回に及んでアメリカ研究セミナーが開かれ、さらに三十年十一月には東北大學からゲルハルト・クナウス講師を迎えて、集中講義が行われた。

本講座は創設以後すでに五四五名の卒業生を出しているが、これらの卒業論文題目についてつぎに概観しよう。桑木教授本講座擔當期に、カントに關するものとして「物自體の問題」などが出ているが、ついで西田教授の時代にかけてはカントと並んでスピノザに關するものが多く、最初の卒業生を出した明治四十三年には三名中二名まで

スピノザを選んでいる。その後大正期は少なく、昭和初年には毎年一名位あつたが、最近はまだ少ない。カント哲學研究は、大正年間に新カント派と獨逸學派にわたつた論文として、「意識と對象との關係に就いて」、「判斷の意味と對象」、「論理的形式主義を本質とする獨逸西南學派」などあり、さらに同じころ論理と數學とを連關させた獨自の研究として「級數と範疇」、「時空論」、「種々なる空間」などが見える。またカント研究で、認識問題のほかに主體的な自覺の問題に結びついたものとしては、「批判哲學と歴史哲學」、「カントに於ける道德律と自由の問題について」など、カント哲學の立場や方法への省察と結びついて形而上學的な綜合的性格を帯びたものに、「內在的意味の世界への幻想」、「カントの *Noumena*」、「批判的方法に於ける事實の前提と規定」、「カントの第一アンチノミーと先驗的觀念論」などあり、「カントに於ける人間の實踐」、「カントに於ける實踐的自由の主體」などは實踐の問題を取り扱っている。

つぎにギリシヤ哲學の研究について見ると、精密な古典文獻學的研究の現われるのは大正十年以後で、「プラトンのイデア論と第三の人間のアポリア」、「プラトンの善論」、「プラトンに於ける自體と存在」、「プラトンのイデアに就いて」のほか一〇名近いが、昭和六年以後は非常に少なくなつてゐる。ドイツ觀念論に關しては、フィヒテが大正十五年から昭和七年までに一〇名、以後十四・十六年に各一名、シェリングでは早く大正六年の「シェリングの象徴思想」がサンボリスム美學の基礎付けを試み、自由論を取り扱つたものは大正十三年の「シェリングとベルグソン」のほか、昭和三・四・九・十三・二十七・二十八にもそれぞれ見られる。

ヘーゲルに關する研究は明治四十四年に初めて見えるが、その後十年間なく、大正十一年から昭和四年までの八年間に六名、總じて西田教授時代は少ないが、昭和五年以後田邊教授時代となつて多く見られるようになった。それらは「悲劇と人間存在」、「悲劇・運命・和解」などの悲劇解釋の研究も多く、ついで精神現象學の研究は自己意識および精神を中心とする自覺の問題に集中され、この種論文は絶えず現われているが、絶對知を問題としたもの

も少数ある。また主として論理についての研究には、「個性の問題と反省的判斷力」、「概念と自由」などがあるが、他の大きな課題は歴史哲學に關するもので、このような研究は昭和十年代に多く見られる。

ヘーゲル以外に歴史哲學を取り扱つたものとして、まずデイルタイが大正三年一名、昭和二年から七年までに六名、ふたたびとんで二十五年に一名、つぎにクロオチエは昭和二年、ドロイゼンは同三年、ヘルダーは同十三年、ジムメルは同二十七年にそれぞれ一名あるが、歴史哲學的關心の高まりは田邊教授時代に現われた最も著しい傾向といえよう。これが宗教的自由の問題と結びつき、世界史の哲學の立場からの自覺という線で書かれたものに、「祈り」、「現實の論理」などがある。

ベルグソンもすでに大正四年に見えるが、毎年のようにとり上げられるのは同十四年以後である。しかし昭和十年代は二名で、戦後はいくらか増加し七名を數えるが、その重點は自由の問題にある。

實存哲學の論文は昭和五年から點點とみえるが、個別的な研究としては、たとえばキェルケゴールは昭和二十年以後四名、ニイチェは同二十五年以後五名で、後期の能動的ニヒリズムが多く主題となり、またハイデッガーは同十九年以後七名、ヤスパースは同十五年以後三名で暗號解讀や超越について書かれている。なお他に實存哲學の立場から中世神祕主義の精神に立ち歸つたもの、西田哲學によつて同じ方向に問題性をもつたものなどもある。

昭和二十四年ごろから一般的に顯著な傾向は、哲學を客觀的な學問としての方法論的な吟味、あるいは哲學史的な研究や原典の文獻學的な研究態度である。プラトン研究は戦後いくらか活潑となり、二十三年以後七名、またアリストテレスは全體として少なく、昭和二年以後九名、主としてメタフィジカとデ・アニマに集中している。中世哲學の研究は極めて少なく、五十年間に「アウグスチヌスの *Distentio Animi* としての時間について」、「アウグスチヌスに於ける惡の問題」など五名を數えるに過ぎない。近世哲學としては戦後デカルトが主として書かれるようになり、二十五年以後大體毎年見えるが、パスカルは三名、さらに英・米哲學も最近いくらか現われるよう

になつた。ヒュウムが二十七年二名、プラグマチズムが二十六、八年に各一名、その他ラッセルの無限論、ホワイトヘッドの相對性論研究などもある。その他數理哲學・科學哲學に關する論文も、昭和初年の「集合論の所謂矛盾」に就いて」以後長らく見られなかつたが、十八、二十七、八年に各一名が科學哲學の、二十五、九年に同じく一名ずつが數理哲學の論文を提出した。

哲學哲學史第二講座（印度哲學史）

本講座は明治三十九年文科大學の開設と同時に設置され、開設委員であつた松本文三郎教授が本講座を擔任したが、大正十五年宗教學第三講座（佛敎學）が創設されるまでは、佛敎學一般の研究をも含んでいた。

そして松本教授が就任前に著わした『支那哲學史』、『佛典結集』、『印度雜事』、『極樂淨土論』などの論著に見られる透徹した史的識見は、その後開講された普通講義「印度哲學」（明三九―昭三）、特殊講義「印度佛敎史」（大三・五・六―一・一四、昭二）、「印度大乘佛敎史」（大八・一二、昭三）、「佛敎傳播志」（大一一）などの研究においてますますその分野を廣め、從來史的考證を無視したため、意識的に、また無意識的に、曲解されがちであつた印度學佛敎學に對し、科學的批判の立場から思想展開の正道を明らかにした。そして「律の研究」（大元）の講義では、廣く印度の思想信仰習慣などの史實を背景として、佛敎戒律の本質を明らかにし、人間としての釋迦の眞精神を追究し、また「佛典批評」（大二）では無數の資料を考證して、佛敎學方法論の眞髓が示された。演習においては、「一切見集」、「金七十論」などの佛敎以外の諸派哲學の論書を使用して、印度における諸派哲學思想の由來、本質および佛敎との關連を研究するとともに、「華嚴五教章」（大一一）、「大乘起信論」（大二）、「因明論」（大一一四）、「異部宗輪論」（大一一五）、「唯識論」（昭三）などの各種佛敎經論を使用して、佛敎學方法論を實地に示し、さらにたとえ

“*David's, Lectures on the Origin and Growth of the Religion*” “*Barnett, Hinduism*” など、印歐米各國學者の論著をも講讀して、かれらの立場と見解を指示し、わが國における佛教專攻者の用意と覺悟を促した。

佛教に關する教授の批評考證は單なる考證學に止まることなく、その考察は深く哲學の領域に達し、近代における佛教學方法論の改革ともいふべきもので、『達磨』、『金剛經』と六祖壇經の研究』、『彌勒淨土論』、『佛典の研究』、『佛教史論』、『佛教史の研究』などの論著、とくに諸種の中央アジア燉煌發掘古寫經典に關する諸論文が教授の立場を實證している。この點は史料考證のみならず、佛教教理についての研究において一層顯著である。すなわち佛教における無我思想、緣起説の眞相を明らかにし、法佛思想の展開をたどり、廣く阿含經典を批評して原始佛教の歴史のおよび論理的意味を解明し、「指鬘譚の進化」、「戒律思想の研究」と相俟つて、小乗から大乘への思想展開の跡が追究された。ほとんどあらゆる小乘經論および大乘經論の成立の由來、教理内容、相互間の思想的關連が明らかにされたのみならず、教授の研究法は淨土教・眞言密教・禪などの起原および發展の研究にも適用されている。さらに教授は、『宗教と哲學』、『宗教と學術』などの著にも見られるように、佛教と道德、佛教と教育、佛教と平和論、優種學と佛教、佛教教團財政の根本主義、宗教家の政治運動などを論じて、佛教と一般社會教學との關係を明らかにし、また「印度醫道の鼻祖耆婆」、「虛榮の僧提婆達多」を初めとし、玄奘、善導、靈仙、明覺、慈雲、弘法、傳教、親鸞などの印度・中國および日本佛教史上の人物を批判する場合にも、つねに人物と社會の接觸に鋭い關心を示し、生きた佛教の相を畫き出すことに努め、單に史實を明らかにするに止まらず、佛教の眞實性を實證的に開明しようとした。

なお教授は宗教の眞諦はその藝術により具體化され、宗教の妙用はその人物により顯現されるという主張から、佛教の美術および美術史を研究し、『佛教藝術と其人物』、『印度の佛教美術』、『支那佛教遺物』などを著わし、また「ポン・ペイの壁畫」、「古代埃及の藝術」および『東洋文化の研究』においては、東洋文化の淵源の究明にはギリ

シア、ローマからさらにエジプトにまで遡らねばならぬとする見解を、實證的に示した。以上のような諸業績およびその他の論稿に見られる指導精神は、廣く東西兩洋の學を綜合批判しようとするもので、その點教授は、東洋學の研究に重きを置いた本學部開設の意義を本講座において具現し、本講座の基礎を築き、學生に對してはその將來性を明示して指導したものとわなければならぬ。

なお松本教授の普通講義以外に、大正五年からは齋藤唯信講師による「佛教教理概論」が加えられて昭和六年に及び、また大正十三年からは羽溪了諦講師によつて「隋唐の佛教」(大一一三)、「唐宋の佛教」(大一一四)、「支那佛教史」(大一一五)などの題目による特殊講義が行われ、また大正七年までは、副科として熱田靈知講師による天台、華嚴、唯識、三論、俱舍などに關する講讀が行われた。

昭和四年松本教授は退官し、同時に本田義英が講師となつてその後を繼ぎ、ついで九年助教授に、さらに翌年には教授に昇進して本講座を擔任することとなつた。當時印歐米における印度に關する諸研究は著しく進歩し、これに伴ない、わが國の印度研究も長足の進展を示し、従つて印度哲學も原典によつて諸哲學思想を正確に把握するとともに、諸思想の歴史的相互關連を追究して、印度哲學史として形成される方向に進んでいた。本田教授の講義ももつぱら原典に基いた研究の成果であり、その範圍は宗教學第三講座(佛教學)との關係から、佛教以外の吠陀・梵書・ウパニシャッド、印度諸學派および諸法典などを中心とするものであつた。演習においても、「Gīādhīya: Saptapadārthi (七句義論)」(昭八)、「Sāṁkhya-kārikā (數論頌)」(昭六)、「Rāmanuja: Bhagavadgītā-bhāṣyam (聖婆伽梵歌の註釋)」(昭九・一〇・一一・一二)などを初めとし、すべて梵語原典が使用され、漢譯の現存するものは併用して比較検討する方法がとられた。本講座で梵語原典が使用されたのはこれが最初で、内外の印度哲學研究の進展に相應するものであつた。

本田教授は、講義などでもつねに主張したように、佛教そのものの研究を専門とせず、佛典を研究する場合にも

印度學的立場を堅持し、佛典における諸相と、印度社會における佛教以外の傳統的思想信仰、乃至は印度の風土などとの關係を考慮して、印度人が産出した佛典をふたたび印度に返し、印度人の立場において素直に研究するという方法をとつた。これは『法華經論』の序説にも述べられているように、印度においては哲學・文學すべての教學が宗教を離れては存在せず、その宗教の理論的方法が哲學であり、實踐的方法論が文學であり、従つていわゆる印度學方法論は、まず印度における宗教の理解を第一條件としなければならないという教授の根本的立場に基くものである。この教授の立場は佛教の傳統的、ことにいわゆる護教的な主觀的解釋とは鋭く對立するが、教授はこの立場から佛典を印度學研究の資料とし、一切の獨斷的護教的解釋を斥け、素直に印度の立場において佛典の本質を究めようとしたもので、『佛典の内相と外相』（昭九）に收められた二十數篇の論文は、このような教授の立場をよく實證している。

これよりさき大正十四年から、本田教授は佛・英・獨・印諸國に留學し、印度學研究上の老大な資料を蒐集して昭和三年歸國した。中でも英國大英博物館および印度省圖書館保管のスタイン發見の西域出土梵文法華經古寫斷簡を影印に付して將來したものとはとくに貴重で、教授はこの新資料に基き、前述のような印度學方法論を應用して法華經の研究に専念、從來の中國・日本の法華經解釋を批判し、法華經の本質を素直に印度の立場で見直し、宗教的に超宗派的に把握しようと努力したが、その研究成果は昭和十九年『法華經論』として出版された。この書は、教授の佛典を印度學的に研究しようとする方法の法華經における應用である。また右の西域梵本法華の斷簡は、ベルリン・アカデミー保管のもの、および「ゲルギット本」を併せ、『西域出土梵本法華經』と題し、昭和二十四年本田教授還曆記念として公刊された。これは歐洲各地に散在保管されている法華西域梵本が一綴下に刊行されたもので、當時内外いずれの法華經原典にも依用されていない貴重な研究資料であつた。また教授は『法華經論』において到達した境地から、かねて繼續中の法華經全部の日語譯に努め、その間に法華經の要文を抜粹した平易な日本語

譯を完成し、それを退官後『法華經新譯要集』(昭二六)として出版した。

本田教授は以上のような印度學方法論から、講義としては「古代印度の法典について」(昭四)、「阿闍婆吠陀と佛敎との關係」(昭五)、「密呪の研究」(昭九)、「無の研究」(昭一一)、「數論に於ける諸種の問題」(昭一三)、「吠檀多思想」(昭一四)、「印度思想に於ける語法の性格」(昭一六)、「勝論を中心とせる印度唯物思想」(昭二二)などを行なつたが、その立場は、松本教授の佛敎學方法論が廣く印度學一般に及び、さらに深化されたものと見るべきであろう。なお本講座では、著しい進展を示した佛敎學界における中觀・唯識方面の研究と印度諸派哲學體系との關連を考慮し、とくに昭和十年以後、引きつづき山口益講師によつて佛敎における因明・唯識・中觀などの立場からする佛敎以外の諸派哲學の批評に關する特殊講義が行われ、また同十八年以後は松尾義海講師が同じく特殊講義として印度論理學の歴史および構造などを講じていた。

なお本田教授は昭和十八年十月印度文化研究所を創設し、本學および大谷・龍谷兩大學その他における印度學研究者を所員とし、本講座と密接な關連を保ちながら、印度古代文化の諸相を綜合的に研究する目的を以て、研究會・圖書の公刊・文庫經營などを行ない、印度學の發展および後進學徒の指導に盡力した。

本田教授は昭和二十三年九月停年によつて退官し、代つて松尾講師がその後を繼ぎ、講義として「印度哲學史」(昭二四)を講ずるとともに、研究として「婆伽梵歌の哲學」(昭二四・二五)、「古代印度の自然哲學」(昭二六)、「諸派哲學に於ける我思想の研究」(昭二七・二八)を講じ、演習にはサーンキヤ派の原典「Yacaspatisūtra; Samikhyatattvakaumudi」(昭二四・二五)、ヴェダタントタ派の原典「Sadānanda; Vedānta-sāra」(昭二五)、印度論理學派の綱要書「Kegavaniṅra; Tarkabhāsa」(昭二六)を使用、また二十七年にはサーンキヤ派の文獻「金七十論」(眞諦譯)を同派の梵語原典と比較検討する方法により實施した。また二十三年以降は佐保田鶴治講師が研究として、ウパニシャッドを中心とする哲學思想・神祕思想およびそれらと古代吠陀との關連、ウパニシャッドとこ

れに續く時代の思想との關係などの問題を講じた。

松尾助教は昭和二十八年七月教授に昇任し、本講座を擔任することとなつたが、引き続き「印度哲學史」を講義するとともに、研究として「印度に於ける業思想の研究」(昭二九・三〇)を行なつた。すでに述べたように松尾教授が講師であつたとき、印度論理學に關する特殊講義が行われたのは、そのころわが國の印度研究が長足の進歩を示し、印度哲學の諸體系についても詳細な研究が行われる状況にあり、そのような研究には印度論理學の解明が不可欠であると考へられたからである。

これよりさき、教授は印度において論理學研究を専門とする正理學派を中心とした研究に入り、その成果は『印度の論理學』(昭三二)にまとめられて公刊された。この書は正理體系の組織そのままに従つて論理學を述べたものでなく、論證の基礎となる知識の起原性質および相互關係、論證形式および論證を有效ならしめる準備の條件としての誤謬論、という諸點を考慮して正理體系の論理學的方面を解説しようとしたものである。さらに翌年には『印度論理學の構造』が出版されたが、これは印度の論理學綱要書ともいふべき梵語原典によつて、印度論理學の内容と組織を論理學派の原典そのままの姿で現わそうとしたもので、この本論に對し印度論理學の性質および歴史的概観を示す序論が附加されている。この書は印度論理學が論證を中心とした論證學の性格をもち、この學と「我に關する學」とが綜合されて論理學派の體系が完成される點を説いているが、教授も主張するように、論證學においては、論證さるべき主題の眞なることを相手に向つて論證するといふ悟他的方面が含まれるとともに、そのような論證の起る基礎として自悟的方面がなければならぬ。印度哲學の諸體系は、それぞれ開祖の教説として與えられたもので、その教の眞性を理解得し、他に向つてこれを論證することが各派の目的であり、その學説が諸派相互間の論争に基いて變遷發達したのも、諸派のもつ論證性に由來する。このような宗教としての諸派哲學には對人的な論證は不可欠のものである。しかも論證學に綜合される「我に關する學」が解脱を目的とするものであり、諸派哲

學の目的もまたここにあり、これが自悟的方面に當るとすれば、教授は論理學體系の研究により諸派哲學の網格を捉え、さらに深く諸派哲學の眞相究明へ進む立場に達したものと見られる。そしてこのようにして到達した立場から、先入の哲學的諸概念を排し、諸派哲學の教を印度の教そのものの立場において素直にその眞相を解明し、教の根源を追究する方向にその後の教授の研究が進んで行つたことは、教授昇任後公表された「サーンキヤ哲學に於ける我について」、「ヴイシェーシカ哲學に於ける和合の意味」、「サーンキヤ哲學に於ける覺について」などの論文に看取されるが、さきに掲げた教授の最近の講義もすべて同様の趣旨に基くものであつた。

昭和二十八年以降は演習が二段階に分れ、従来の演習は演習Ⅱとなり、その前段階として演習Ⅰが加えられた。

これは専攻學生の指導とその單位修得を考慮したものであるが、また印度哲學の眞相解明にはその根柢になる瑜伽の研究が不可欠であるとし、二十七年以降演習に「瑜伽經」が使用され、經に對する諸種の梵語註釋を参照しながら經の眞意を探究する方法が實施された。なお佐保田講師は引き続き研究として「ウパニシャッド神祕思想の起源」(昭二八)、「ウパニシャッド文獻の解釋學的研究」(昭三〇)などを講じ、さらに二十九年からは同じく研究として善波周講師の「古代印度の科學思想」(昭三〇)、「チャラカ本集の研究」(昭三一)に關する講義が加えられたが、これは古代印度の哲學・宗教・文學が、當時の科學思想と不離の關係にあるという印度思想の特質を考慮して計畫されたものである。

本講座設置以來今日まで、すでに一二五名の専攻生を世に送つてゐるが、つぎにそれら卒業論文の主題について最後に概観しよう。まず昭和四年松本教授退官までの期についてみると、印度では十二緣起・八正道などの佛陀の根本教義を初めとし、賴耶緣起・業思想・成佛思想・起信思想・六波羅密・菩薩論・禪定・緣起の實相などを對象とした研究があり、經では法華經・涅槃經・維摩經・無量壽經・那先比丘經などが選ばれ、律に關する研究も見え、論では中論・唯識三十頌などが取りあげられ、印度佛教史に關するものや、また論師を中心としたものとして龍樹に

關する二、三の研究がある。つぎに印度哲學一般に關しては、印度輪廻思想の變遷、婆羅門教の唯心主義實在論、佛教以前の解脱論、ウパニシャッドと佛陀の教理などが主題に選ばれ、佛教以外の印度諸派哲學體系の中では、「ヴェーダーンタの本體論」、「耆那教の主要教理について」の論文がある。中國佛教に關しては、支那華嚴史、天台教判、淨土思想、法華經の支那傳譯史、「解脱論として見たる洞山の五位說」などが研究對象にされ、慧能、曇鸞、慧遠など佛教史上の重要人物についての研究もあり、主題は華嚴・天台・淨土・禪にわたつてゐる。日本佛教關係では密教・淨土教・兩部神道、および親鸞、一遍についての研究や、淨土教美術など佛教美術に關する論文が見られ、特殊なものとしては「珠數考」などがある。以上のようにこの期では印度・中國および日本の佛教にわたつて廣範圍に、佛教學上の種種の問題が取り扱われ、佛教以外の印度哲學一般の分野でも、相當重要な問題が選ばれてゐるのである。

ついで昭和四年以降についてみると、佛教關係では、賴耶緣起論、初期佛教の禪、法華經に現われた印度諸神などが主題となり、廣く印度哲學一般の分野から問題を取りあげたものに、古代印度の密呪思想、解脱思想、時間空間の問題などがある。ウパニシャッド關係では「カータカ・ウパニシャッドに就いて」、「カータカウパニシャッドに於けるヨーガ說」、「*neti neti* 論」、「マインド・ワークヤ頌一元論の論理的構造」などがあり、バガヴッドギーターに關しては、ギーターの誠信思想、ギーター倫理の形而上學的根據、およびギーター註釋によるラーマヌジャの思想などが主題として選ばれ、諸派哲學の分野では、サートンキヤ哲學一般、およびこの學派における因中有果論・覺・自性・二十五諦知と區別知などが問題とされ、他の學派では、ヴェーダーンタのシャンカラに關するもの、「ヨーガ學派に於ける *citta* の性格」、「ジャイナ教に於ける兩元の交渉」、「タルカサンクラハに於ける句義說について」などの論文があり、また「正理學派の比量に於ける因及び似因について」、「法稱の論理思想に關する一考察」のような印度論理學に關するものもある。このように佛教、ウパニシャッド、バガヴッドギーターおよび諸派哲學

の分野にわたり論文の主題が選ばれているが、佛教關係のものが比較的少なく、ことに中國・日本佛教に關するものはほとんど見られない。この傾向は本學部に別に佛教學講座が設置された事情によるが、この點と關連し佛教以外のサーンキヤなどの諸派哲學、ウパニシャッドおよびギーターの研究が多くなり、しかも原典に基く研究であるとともに、研究の對象が限定されていることなどは、前期と比較してこの期の論文主題の選定に現われた著しい特色と見るべきであり、同時に内外における印度哲學の研究狀況とも相應するものであろう。

哲學哲學史第三講座 (支那哲學史)

哲學哲學史第三講座には支那哲學史が當てられ、明治四十二年五月に創設された。初代の專任擔當者は、明治四十年七月助教として來任した高瀬武次郎であつたが、支那文學講座擔任の狩野直喜教授が講座開設以前から大正



高瀬教授

十四年まで、普通講義・特殊講義および演習の一部を受けもつた關係上本講座の學問的特色はその學風に影響されるところが少なくない。明治時代のわが國支那哲學史の一般的傾向は、江戸時代以來の傳統の上に西洋哲學の臭味を加え、宋明性理の學を對象とする觀念的研究が主流をなしていたが、狩野教授は早く清朝考證の學を修めたのみならず、歐米人の支那研究にも注目したので、ここに實證のないいわゆる實事求是の學風が樹立されることとなつた。これは本講座の著しい特色の一つである。

高瀬助教は大正四年教授となつたが、早くから陽明學者として令名があり、本講座擔任中の特殊講義も「二程子朱陸二子」(昭二)、「王陽明劉念臺」(昭三)のような題目が多く、講讀演習にも「周易集注(來知德)」(大二三―昭三)、

「傳習錄」(大一二)「明儒學案」(大一三)などが用いられた。

小島祐馬教授は大正十一年八月助教として來任、昭和四年一月高瀬教授退官の後をうけて同年四月から講座を擔任、六年三月には教授となり、六月「支那古代社會の研究」によつて文學博士の學位をうけた。その學問は從來のいわゆる經學的方法の長所を存するとともに、基礎科學の知識を廣く利用するところに著しい特色がみられる。普通講義「支那思想史」は時代を追つて毎年繼續講述され、支那思想を支那社會の歴史的發展との關聯において、あるがままに全體として觀察することに努めている。特殊講義のうち、「春秋通論」(昭四)、「周易序說」(昭六)、「尙書研究」(昭五)、「王充研究」(昭一二)などは、經書および諸子の書を直接對象とする論考であり、「古代支那人の信仰」(昭七)、「五行說研究」(昭一〇)、「支那に於ける數理的宇宙論」(昭一一)、「支那に於ける法の概念」(昭一四)、「清代今文之學」(昭一六)が擧げられる。講讀および演習の課本には、「日知錄」(昭一一・一二)、「汪中述學」(昭一三)、「周禮注疏」(昭一四・一五)、「困學紀聞」(昭一六)などが多く用いられた。

以上の研究題目・研究方法および一部課本の性格によつてほぼ明らかのように、小島教授の學問は、狩野教授の遺した考證學による實證主義的基礎の上に、さらに西洋諸科學の知識を豊富に加えて、支那の精神文化的諸現象を闡明しようとするものであつた。その講義に宗教社會學的傾向が比較的顯著に見られるのは、教授が昭和二年から四年まで歐洲、特にフランスに留學し、フランス支那學の影響を受けたためである。ここにおいて清代考證學の長所をよく存しながらも、決して單にその祖述を事とするに終らない、全く獨自の學問が小島教授によつて樹立され、今日に至るまで本講座の特徴とすべき學風となつてゐる。

なお昭和十四年度には、重澤俊郎講師が特殊講義「春秋繁露研究」を、木村英一講師が講讀を擔當し、十五年度には平岡武夫講師が特殊講義「尙書の研究」を、常盤井賢十講師が講讀を擔當、十六年度には同じく重澤講師が特

殊講義「荀子研究」を擔當した。

小島教授は、昭和十一年十月から十三年十一月まで文學部長の任に就いた。その間昭和十三年には帝國大學總長任命権の問題について、時の荒木文相を中心とする文部當局と、大學側の間に數次の折衝が行われたが、教授は本學委員の一員として終始指導的地位にあり、大學自治の擁護に與つて力があつた。また昭和十四年、當時の社會的要請に應えて本學に人文科學研究所が設置せられるや、教授はその初代所長を兼ね、同研究所の使命とする人文諸科學の總的研究の體制を整えることに盡力した。

小島教授は昭和十六年十二月停年退官したが、その後をうけて從來講師を委嘱されていた第三高等學校重澤俊郎教授が十七年三月本學助教として來任し、二十二年一月からは本講座を擔任、二十五年二月「經學研究」によつて文學博士の學位を授けられ、同年四月には教授となり、現在に及んでいる。重澤教授の普通講義は「支那思想史」と題して年代順に毎年繼續講述され、支那思想をその發生の基盤たる社會的政治的諸條件と不可分の關連において理解することに努力が拂われ、研究(特殊講義)と演習は普通講義と相補なつて、支那哲學史の全體的把握に役立たしめようとする構想の下に立案されている。十七年以降における研究および演習のうち、先秦漢代に關する主な題目は「春秋學の展開」(昭一八)、「漢書王莽傳」(昭二五・二六)、「周禮の思想的研究」(昭二七・二八)、「管子の書研究」(昭三〇)などが挙げられ、三國六朝に關するものとしては、「顏氏家訓」(昭二二)、「抱朴子研究」(昭二三)、「皇侃論語義疏」(昭二四)、「三國志」(昭三二)があり、唐宋を對象とするものでは、「通典」(昭三〇)、「翁注困學紀聞」(昭三三)、「文獻批判の精神」(昭二六)、「王臨川全集」(昭二七・二八)、「唐宋宋初の合理主義」(昭二九)、清を對象とするものでは、「述學」(昭二六)、「清末啓蒙思想の發展」(昭三二)、「日知錄」(昭三二)、「文史通義」(昭三二)、「漢學商兌」(昭二七)、全體に關するものでは「史學思想の研究」(昭三一)などがある。

なお講師として、研究または演習の一部を擔當した者には、十七年から二十六年までの十年間に木村英一、平岡

武夫、森三樹三郎の各講師がそれぞれ數年ずつあり、二十七年には加藤常賢講師が「小學と古代學」、二十八年には後藤俊瑞講師が「朱子倫理の根本問題」、二十九年は佐藤匡玄講師が「論衡研究」、三十年には福永光司講師が「魏晉老莊思想の研究」、本田濟講師が「續古文辭類纂」をそれぞれ講じ、本年度は本田、福永兩講師のほかに湯淺幸孫講師の「近世庶民道德の研究」が行われている。

本講座は昭和十一年以降、すでに三九名の専攻生を出しており、現在は舊制大學院四名、新制大學院三名、學部學生一名を有しているが、それら最近二十年間の學生の研究對象を通觀すると、本講座開設以來の主流的學風に照應するかのように、中世以前の研究が過半を制していること、近世を對象とする研究は十八年に初めて見えて以後ようやく盛んとなる傾向にあり、かつその研究方法は科學的となり、かつての空疎固陋の風は次第に一掃されつつあることなどが看取される。

なお本講座に深く關係する學會として、早く本講座開設に先立つ明治四十年十月に創立された「支那學會」が存するがこれは別項の記述にゆずる。つぎに雜誌『支那學』は、本講座出身の小島祐馬、本田成之および支那文學出身の青木正兒の三名が中心となり、廣く本學部出身支那學關係の有志を糾合して「支那學社」を興し、大正九年九月から發刊されたもの。最初三年間は月刊であつたが、以後不定期刊行となり、四冊をもつて一卷に當てていたものの昭和二十二年に至つて停刊するに至つた。本誌はもともと學外の事業であるが、本講座と密接な關係を有し、とくにわが國は勿論、海外支那學界においても、大いにその權威を認められた點は注目しに値する。

つぎに「支那哲學史研究會」は、支那哲學史の研究を主目的とする學會で、昭和二十二年に成立した。本會は昭和十七年以後の本講座卒業生および大學院學生をおもな構成員とし、毎月一回一人ずつ研究發表を行ない、重澤教授の指導のもとに討論をなし、また時には他大學との連合研究會をも開催している。また本會と密接な關係をもち、本研究室の編輯發行によつて、『東洋の文化と社會』が出されている。これは本講座關係者の支那思想文化史に関

する研究を収めた論文集で、昭和二十五年に初刊、以後平均毎年一冊を出し、三十年六月で第四輯に及び、支那哲學史專攻のわが國唯一の刊行物として大きな意義をもっている。なお支那哲學文學の全國學會として昭和二十四年創立された「日本中國學會」でも、重澤教授は専門委員に選ばれている。

哲學哲學史第四・五・六講座（西洋哲學史）

本學部哲學科における西洋哲學史研究は、明治三十九年九月の文科大學開設以來、哲學哲學史講座として、つねに哲學と共通の講座において行われてきた。しかも文科大學における講座の種類、およびその數を定めた明治三十年六月の勅令第一三五號によつても明らかのように、西洋哲學史が哲學哲學史の二講座のうち、その第一講座において併せ講ぜられたことは、同第二講座が印度哲學史を單獨に講じたのと比較して、はなはだ特徴的であり、これは哲學研究が普通に西洋哲學研究を意味するわが國の事情を反映している。のちに哲學哲學史の講座の數が増加して、西洋哲學史が哲學から分離して講ぜられるようになっても、哲學研究と西洋哲學史研究とは、その内容においても、方法においても、つねに密接な關係と交流を保ち、印度哲學史や支那哲學史の研究が、事實上哲學から獨立して行われていることと對照される。

哲學と西洋哲學との講座の關係は以上のようなものであるが、形式的には明治四十五年五月哲學哲學史第四講座が増設され、これによつて第一講座が體系、第四講座が歴史、すなわち西洋哲學史と一應決定し、ここに西洋哲學史は哲學とは獨立の講座をもつこととなつたのであり、この時から、西洋哲學史の講座の歴史が始まつたものと見ることが出来る。以下哲學と西洋哲學史に共通する歴史は哲學講座に譲り、西洋哲學史講座のみにかかわるものを略述しよう。

前記のように三十九年六月哲學哲學史第一講座が設置され、八月文科大學規程が制定され、西洋哲學史の科目は哲學科に屬する正科目の一つに定められ、九月桑木嚴翼教授によつて西洋哲學史が哲學概論と併せて開講された。翌四十年桑木教授が海外に留學した後、同年七月朝永三十郎助教授が來任し、四十・四十一年度にわたり、普通講義として一般西洋哲學史、特殊講義として最近哲學史などを講じた。四十二年九月桑木教授が歸朝し、代つて朝永助教授がドイツに留學したので、四十二年から大正元年に至る四年間は、桑木教授が西洋哲學史の普通講義および九世紀ドイツ哲學史を講義し、また演習にカント、フイヒテ、ヘーゲルを讀んで、ドイツ觀念論の理解を指導した。



朝永教授

これが第一講座における明治年間の西洋哲學史講義の概観である。わが國の哲學界全般が長くドイツ哲學の理解研究を主題としてきた性格を、本講座もその哲學科草創の時に於いてすでに共有していたのである。

さて前述のように明治四十五年五月哲學哲學史第四講座が増設され、西洋哲學史が獨立して講義されることとなり、朝永助教授は大正二年月教授に昇任してこの第四講座を擔任した。教授は昭和六年三月停年退官するまで在任二十五年餘、その間よく本講座の充實に努めた。教授の明晰なる講論と濃厚な人格とはそのまま今日まで本講座の傳統に影響を與えている。大正十五年八月以來學習院天野貞祐教授が助教授として來任し、朝永教授を助けていたが、昭和六年三月教授に昇任し、朝永教授退官の後をうけ、第四講座を擔任した。

またこの間昭和二年十月に哲學哲學史第五講座がさらに増設され、はじめしばらくは西田幾多郎教授が擔任したが、同四年四月東京商科大学山内得立教授が講師を囑託され、ついで六年四月からは本學教授に轉じて第五講座を擔任した。以後第四講座は西洋近世哲學史を、第五講座は西洋古代中世哲學史を分擔することとなつた。四年四月

には山内講師とともに九鬼周造も講師となつたが、八年三月助教授任に、さらに十年三月には教授に昇任し、この時天野教授が倫理學講座に轉じた後をうけて、第四講座を擔任した。かくて山内教授は古代と中世を、九鬼教授は近世と現代を分擔し、その後本講座はその研究と學生の指導に着着と成果をあげていたが、不幸九鬼教授は病によつて昭和十六年五月急逝した。



山内教授

ここにおいて第四講座は十七年四月から本學人文科學研究所の高坂正顯教授が授業擔當し、山内、高坂兩教授の分擔は、太平洋戰爭期の緊迫と混亂の中を二十二年まで續いた。この時いわゆる公職追放のことがあつて、本學の陣容も少なからぬ改變を迫られたが、結局山内教授は哲學哲學史第一講座を擔任することとなり、高坂教授は職を辭した。



九鬼教授

かくて二十二年五月大阪高等學校野田又夫教授が助教授として迎えられて第四講座を擔任し、引き続き七月には東京文理科大學田中美知太郎講師が助教授として來任し、第五講座を擔任した。さらにまた同じ月に山内教授らの盡力と平木産業株式會社の奨學金寄附により、新たに哲學哲學史第六講座（西洋中世哲學史）が設置され、十一月に廣島大學高田三郎教授が助教授として迎えられた。その後二十五年二月に田中、高田兩助教授は教授に昇任した。このようにして本講座は、三講座がそれぞれ古代、中世、近世現代を分擔して今日に至つているのであるが、西洋

哲學史の三つの時代區分に對して、それぞれ獨立した講座をもつことは、わが國の大學において他に例を見ない本講座の誇るべき特色である。

西洋哲學史の各講座の變遷はほぼ以上略記した通りであるが、各講座擔任の教授のほか昭和十三年以降今日まで、三井浩、下村寅太郎、服部英次郎、澤瀉久敬、多賀瑞心、プリオット、エグリ、三宅剛一、大島康正、鈴木照雄、森口美都男、山田晶、山元一郎、岡田正三、中村善也、近藤洋逸、藤澤令夫の諸講師、および教養部石田仁助教授、田村松平教授などが、それぞれ得意の分野において講義・講讀を擔當してきている。

いまそれらの講義題目を列記することはさけるが、概観すると、大正年間から昭和初期にわたつては、朝永教授が近世哲學、とくにデカルトおよびカントからヘーゲル後に至るドイツ觀念論の研究に努め、天野教授もまたドイツ觀念論、とくにカントに集中した。その後昭和二十二年までは、山内教授がギリシア哲學の廣範多岐の問題、とくに論理的問題に関心し、また廣く中世哲學にもトマスを中心として論及した。九鬼教授は、フランス哲學をデカルトからベルグソンに至るまで系統づけるとともに、とくに現代哲學（佛・獨）の研究を重んじて、今日流行の實存哲學をすでに分析紹介している。

戦後の本講座はわが國の哲學界一般と等しく傳統の一度絶えた處に、清新の氣と方法的緻密さをもつてテキストの分析をしようとしている。すなわち古代哲學史講座では、西洋思想の源流に棹さすという強い意識をもつてギリシア古典の分析に文獻學的嚴密さを期することを誇りとしている。そしてそれはそのまま中世、近世の講座の目指すところでもある。各講座を通じ、全體として歴史的研究を能う限り精密嚴格に進めていることが、戦後の特色といえるであろう。山内教授の提唱によつて、昭和二十三年以來哲學および西洋哲學史專攻の學生すべてにギリシア、ラテンの古典語が必須となつたことは、本講座の全體にわたり戦前とは異なる効果をさまざまにあげつつある。また昭和二十八年度には理學部小堀憲教授により數學史が、三十年度には近藤洋逸講師により近代科學思想史の集中講義がなされたことは、哲學史の視野をひろげる意味で特筆すべきことと思われる。

いま試みに本講座において演習・講讀に用いられたテキストを分類してみると、三度以上用いられたものは、プ

ラトソン(二五回)、アリストテレス(一一回)、アウグスチヌス(九回)、トマス(一六回)、デカルト(八回)、ライプニッツ(五回)、カント(二二回)、ヘーゲル(四回)、ベルグソン(一二回)であり、戦前戦後を比較して

演習・講読テキストの種類		
哲学者名	年度数	(戦後)
プラトソン	25	(11)
カント	22	(10)
トマス	16	(12)
ベルグソン	12	(0)
アリストテレス	11	(4)
アウグスチヌス	9	(7)
デカルト	8	(2)
ライプニッツ	5	(3)
ヘーゲル	4	(3)
ブートルー	2	(0)
フツール	2	(0)
キケロ	2	(0)
プロチノス	2	(0)
パスカル	2	(2)
シェリング	2	(2)
アベラール	2	(2)
ボエチウス	1	(1)
アンセルムス	1	(1)
ボナベンチウラ	1	(0)
マルブランシュ	1	(0)
ヒューム	1	(1)
フィヒテ	1	(1)
ディルタイ	1	(1)
ラシュリエ	1	(1)

特殊講義(研究)テーマの分類	
テーマ	年度数
ギリシア哲学の諸問題	16
カント研究	16
ドイツ観念論	14
トマス研究	13
アリストテレス研究	7
プラトソン研究	6
十九世紀哲学	6
現代哲学(特にフランス)	6
デカルト研究	4
ライプニッツ研究	3
パスカル研究	2
アウグスチヌス研究	2
アベラール研究	2
ボエチウス研究	1
アンセルムス研究	1
ルネッサンス哲学	1
バークレー研究	1
ヒューム研究	1
ハイデッガー研究	1
数学史	1
近代科学思想史	1
その他	2

も、アウグスチヌスを除いて、これら古典の比重に變化はない。ただ中世哲學史講座の新設によりアウグスチヌスとトマス研究が、古代のプラトン研究とともに飛躍的に進歩しつつあることは戦後の顯著な事實である。

本講座は大正七年はじめて西洋哲學史專攻の卒業生を出して以來、現在まで一二五名（うち選科三名）の卒業生を世に送つてゐる。今それらの題目をみると、時流を反映しつつも哲學史の研究は、戦前戦後を比較して、その主題にことさらに變遷を見せないことはむしろ當然であろう。その時期の擔當教授の關心によつていくらかの起

卒業論文テーマ		
哲學者名	卒業者數 (戦後)	
カント	32	(7)
プラトン	25	(11)
ベルグソン	7	(1)
トマス	6	(5)
ヘーゲル	5	(2)
アリストテレス	4	(2)
ディルタイ	4	(3)
フィヒテ	3	
シェリング	3	
アウグスチヌス	2	(2)
デカルト	2	
スピノザ	2	(1)
ハイデッガー	2	(2)
プロチノス	1	
ドルバック	1	(1)
ニイチェ	1	(1)
ワイルド	1	(1)
フッセル	1	(1)
リッケルト	1	
ラスク	1	
ドリーシュ	1	
ラスキ	1	(1)
ラッセル	1	(1)
その他	12	(4)

伏はあるにしても、卒業論文の主題はやはり各時代の代表的哲學者に集中してゐる。また

哲學史專攻 學生の研究態度方法は、哲學專攻の學生のそれととくに差異あるものではない。いま卒業論文の主題を哲學者の名によつて分類すると右の表のように、古代・中世・近世において、それぞれプラトン、トマス、カントが研究の焦點となつてゐることが知られる。なお現代哲學でベルグソン研究者が多くあつたのは九鬼教授の時代に限られてゐる。ただ戦後の特色と思われるものを強いてあげれば、まず中世哲學史講座の新設によつて、トマス、アウグスチヌスを中心とする中世哲學研究者が増加したこと、つぎに近世哲學史で、戦前わが國の哲學を支配したかに見えるド

の邦譯、および『カント純粹理性批判』(昭一〇)などの著書があるが、これは新カント學派の認識論的カント解釋に對して形而上學的カント解釋を主張したものである。なお天野教授および西田幾多郎教授については、それぞれ倫理學・哲學講座における記述に詳しい。

つぎに山内教授は現象學をわが國へ紹介した劃期的業績とともに、ギリシヤ哲學の研究と邦譯を進めるといふ廣範な成果をあげた。その大部な西洋古代哲學研究は、『ギリシヤの哲學 上・中』(昭一九・二一)となつて現われつつある。なおその著述および關西哲學會結成への盡力などについては、これまたすでに哲學講座で觸れたところである。

九鬼教授は早くフランスに遊學して、かの地で幾多の論文を發表し、“Propos sur le temps”(昭三)を出版するなど、まず海外で活躍したが、第四講座擔任以來は、わが國で從來比較的閑却されていたフランス哲學の研究に力を注ぐとともに、いち早くわが國に實存哲學を紹介した。その著『いきの構造』(昭五)、『偶然性の問題』(昭一〇)、『人間と實存』(昭一四)、『文藝論』(昭一六)、『西洋近世哲學史稿 上・下』(昭一九・二三)、および隨筆集『をりにふれて』(昭一六)、詩集『巴里心景』(昭一七)などは教授のユニークな學風を物語つてゐる。

戦後本講座の陣容は全く一新されたが、野田又夫教授は、『デカルト』(昭二二)、『近代精神素描』(昭二二)、『啓蒙思想とヒューマニズム』(昭二三)、『哲學入門』(昭二三)、『デカルトとその時代』(昭二五)、『西洋近世哲學史』(昭二五)、『パスカル』(昭二八)、『人生と眞實』(昭三〇)などの著書、およびラヴェンソン『習慣論』(昭一三)、デカルト『精神指導の規則』(昭一四・二五)、アラン『デカルト』(昭一九)、ブートルー『自然法則の偶然性』(昭二〇)などの邦譯を公にしている。昭和二十八年八月ブラッセルで行われた第十一回國際哲學會には、日本學術會議を代表して出席した。

つぎに田中美知太郎教授には、『ソフィスト』(昭一六)、『ロゴスとイデア』(昭二三)、『哲學初歩』(昭二五)、『西洋

古代哲學史』(昭二六)、『善と必然との間に』(昭二七)、『哲學のために』(昭二九)などの著者、およびプラトン『テアイテトス』(昭一三)、『ヘラクレイトスの言葉』(昭二三)、『プロタゴラス』(昭二四)、『善一者に就いて』(昭二三)、『プラトン』(昭二五)、『クラテスの辯明』(昭二五)などの文獻學的業績のほか、『ギリシヤ人の智慧』(昭一七)、『古典的世界から』(昭二一)、『ギリシヤ研究とヒューマニズム』(昭二二)、『近代思想と古代哲學』(昭二三)、『政治的關心』(昭二三)、『自由について』(昭二八)、『古典の智慧』(昭二八)、『哲學的人生論』(昭二九)、『原子力時代に思う』(昭三〇)など多彩な啓蒙書があり、ギリシア古典の知慧と現在とを統一するその學風を示している。また教授は日本西洋古典學會の常任委員でもある。

高田三郎教授は長年オックスフォード大學で研鑽した學殖をもつて、中世哲學會の指導的地位にあり、アリストテレス『ニコマコス倫理學』(昭一三)、および『プラトンの自叙傳』(昭二四)などの邦譯を公にしている。

本講座の對外的活動は哲學講座とともに、「京都哲學會」およびその機關誌『哲學研究』、「哲學茶話會」・「關西哲學會」などを通じて行われているが、これらについては哲學講座の記述に譲り、このほかに昭和六・七年前には西洋哲學史專攻の間で「西洋哲學會」が組織され、例會が催されたことがあり、また昭和二六、七年前には本講座專攻大學院學生が主體となつて、若い研究者の發表機關としての雜誌『道程』が文學部内で編集されたこともあるがいずれも不幸短命に終つてゐる。日本哲學會(昭二四設立)、日本西洋古典學會(昭二五設立)、中世哲學會(昭二七設立)に對しても多大の貢獻をなしつつあることは勿論である。またさきに山内教授らの企圖になるトマス『神學大全』の譯業は、現在中世哲學史講座の事業として高田教授の指導により遂行されており、古代哲學史講座においても田中教授の指導によつてプラトンの著作の邦譯が着着と進行している。

またとくに海外との關係を述べれば、戦後外國との交通が自由になるにつれ二六年前から外國の學者の訪問もようやく繁くなつてゐる。二六年八月には米國スタンフォード大學のJ・D・ゴヒーン教授が、京都アメリカ

研究セミナー哲學部門の講師として、十日間にわたりアメリカ哲學史の諸問題を紹介討論した。翌年六月には同じくテネシー州南部大學H・ジョンソン教授が、「キェルケゴール思想の辯證法的構造」と題して三回の連続講演を行ない、また一十八年二月にはオックスフォード大學M・ダーシー教授が、「聖トマスとニューマン—信仰の眞理—」と題する講演を行なつてゐる。さらに三十年八月米國ケニヨン大學V・C・オールドリッチ教授は、京都アメリカ研究夏期セミナーにおいて四週間にわたつて英米の新しい言語哲學について講義と討論を行ない、引き続き秋季に同志社大學とともに、本學においても普通講義を行なつた。このように外國學界との交流も次第に盛んになりつつあることは、最近の本講座の顯著な特色であるが、戦後新たな發足をなした本講座はここにほぼ十年、今やその基礎と體制を確立して、明晰と着實との傳統をいよいよ廣く深く培うべきつぎの段階を歩み始めている。

心理學講座

本講座は明治三十九年六月文科大學の創設と同時に開かれ、同年七月初代の擔任教授として東京高等師範學校松本亦太郎教授が任命された。松本教授は創設當初から優秀な心理學實驗場の建設を企圖し、四十一年十月には、木造平屋建一〇八坪の實驗場が完成したので、それまで法科第八教室の一隅にあつた實驗室がその獨立家屋に移轉した。この建物は昭和二十年八月の戦時疎開のため七室五八坪を失なつたが、一部分はなお現存している。實驗場の落成とともに三十九年九月以來在勤していた野上俊夫が講師となり、四十二年十二月には本講座第一回卒業生の千葉胤成が副手となつて本講座の充實が行われた。この際實驗場の機械・雜誌などは松本教授の前任教から保管轉換してその缺を補なつた。

明治四十四年九月野上講師は助教教授となつたが、この年度の講義は松本教授が概論、および「意志の心理」、「美

意識の民族的發達」を講じ、野上助教は實習として「比較心理學」を擔當していた。しかし大正二年六月に野上助教は獨・佛・米へ三か年の留學を命ぜられ、松本教授はまた同年七月東京帝國大學に轉出することとなつたので、一時西田幾多郎教授が本講座をあずかり、千葉副手が講師を囑託された。野上助教は大正五年八月歸朝したが、その間の講義は、たとえば大正二年度は西田教授の概論、深田康算教授の「感情の心理」、桑木殿翼教授の演習、千葉講師の「實驗心理學」、實習、大正四年度は千葉講師の概論、および「感情論」、大槻快尊講師の「認識の心理」、米田庄太郎講師のヴント「民族心理學要論」の講讀などが行われていた。

さて野上助教は歸國後、大正六年九月教授に昇任、千葉講師も同年九月助教に任ぜられた。千葉助教は、その後大正九年海外留學に出發し、十二年には東北帝國大學教授として轉出することとなつたので、大正十一年四月岩井勝二郎が講師に囑託された。岩井講師は昭和四年二月助教となり、その年四月から二か年ドイツに留學、六年六月歸朝した。その間四年から九年度まで第三高等學校高木貞二教授が講師として學生の指導に當つた。この期間を通じて、野上教授は普通講義として概論を講じたほか、特殊講義として、「感情の心理」(大六)、「學校作業の心理學的研究」(大七)、「道德觀念の發達的研究」(大九)、「心身の性別」(大一一・一三・昭三・四)、「精神的生長及衰頽」(昭七・八)などを講じ、リボ「感情心理學の諸問題」(大六)、ホール「青年」(大八・昭八)、モイマン「教育心理學抄」(大九)、ジェームズ「宗教經驗の諸相」(大〇一・二)、ソーンダイク「教育心理學」(大二三・二四)、デュマ「トレテ」(昭二・三)、ヴント「民族心理學要論」(昭四・五)、ヴント「グルンドリス」(昭九・一〇)などが講讀されている。また千葉助教は轉任まで、實習および「意識の問題」(大五)、「心理學對象論」(大七)、「意識現象の種別」(大八)などを講じ、代つて岩井助教は、「心理學の實驗的研究法」(大一一)、「知覺の心理」(大一二・一三)、「聯想心理學」(昭三)、「ライプツヒ學派」(昭八)、「發生的研究法」(昭九)などを講じ、同様に講讀・實習をも擔當したが、高木講師も「形態心理學」(昭五)、デソワール「心理學史抄」(昭七)、コフカ「精神發達の基

礎」(昭八)などを講述した。

またこの間、さらに副科目として生理學および精神病學の講義が開講された。すなわち生理學では醫學部の天谷千松教授、荒木寅三郎教授、石川日出鶴九教授が、精神病學では同じく今村新吉教授がそれぞれ相ついで授業を擔當した。

さて昭和九年高木講師が東京帝國大學に轉出した後は、岡道固講師が同十八年九月まで、「宗教心理學」、「ヴント以後の心理學」、「信仰の心理學」などを講じた。岩井助教授は、昭和十一年「心理學における形態學說」を講じ、ヴントの「グルンドリス」の講讀を行ない、實習を指導したが、不幸病をえて十二年十一月に逝去し、その前日附をもつて教授に任ぜられた。

野上教授は、昭和十七年五月の停年退官まで、續けて概論を講じ、その他「具體的心理學序論」(昭二二・一三)、「老年期の心理」(昭一四)、「感情の心理」(昭一五)、「心身の發育」(昭一六)、「道德思想の發達」(昭一七)を講授するとともに、ヴント「グルンドリス」(昭九一・一二)、ジェイムズ「宗教經驗の諸相」(昭一三・一四)、ゴールトン「人間能力の研究」(昭一五)、マクドゥガル「集團心」(昭一六・一七)を講讀した。岩井教授の死後は、高木貞二、園原太郎兩講師がその缺を補ない、高木講師は「知覺の心理」(昭一三)、「學習の問題」(昭一四)、「現象空間の諸問題」(昭一五)、「知覺の問題」(昭一六)、「生活空間の構造」(昭一七前)、「行動變容理論」(昭一七後)、「現象空間の諸問題」(昭一八)を、また園原講師は「心理學實驗法」(昭一三)、「適性の心理學」(昭一四)、「行動發達の諸問題」(昭一五)、「心理學方法論」(昭一六・一七)、「具體的思惟」(昭一七後)、「精神發達の心理」(昭一八)を講じ、併せて實習の指導に當つた。

昭和十七年五月野上教授退官後は、教育學教授法講座の木村素衛教授が、一時本講座を擔任することとなり、十七、八年度にはディルタイの「イデー」を講讀したが、十七年六月から十八年三月までは、さきに本學助教で

あつた千葉胤成講師が「心理學概論」を講じ、また内藤耕次郎講師も「場と因子の問題」(昭一七)、「科學的創造」(昭一八)を講じ、園原講師の特殊實驗と並んで、初級實驗の指導を擔當した。なお十三年度および十七年度には醫學部三浦百重教授の「精神病學概説」が開講された。

ついで昭和十九年七月には九州帝國大學に在任した矢田部達郎教授が本學教授として來任、本講座を擔當することとなり、翌二十年一月には園原講師も助教授に任ぜられ、さらに新たに八木冕講師も加わつて、ここに本講座の陣容が整備されるに至つた。矢田部教授は二十年以降毎年心理學概論の講義を行なうと同時に、現代心理學の諸問題について研究・演習を指導し、二十二、三、四年にわたつては思考心理學を講じた。園原助教授は隨時現代心理學の研究・演習に参加し、八木講師とともに實習の指導を行なう一方、「知覺の發達」(昭二二)、「知覺相制」(昭二二)、「兒童心理學」(昭二三)、「發達心理學」(昭二六―二八)などを講じた。八木講師は實習指導のほか外國書の講讀を行ない、その間「學習の心理」(昭二三・二七)を講じ、二十四年六月には本學專任講師に任じたが、二十七年四月東京大學助教授として轉出した。

このほか教養部和田陽平教授は二十三年から二十八年まで主として知覺の心理について説述し、同じく佐藤幸治教授は二十七年以降人格心理學、意志心理學の講義を行ない、また柿崎祐一助教授は二十八年から和田教授の後を受けて知覺心理學を講じた。八木講師の後任としては二十七年七月から本吉良治講師(專任)が主に外國書の講讀と實習の指導に當つているが、二十九年以降は心理學實驗法を講じている。なお二十九年および三十年には教育學部末水俊郎助教授が社會心理學を講じたが、學生中には教育學部の心理學關係の諸講義を聽講する者も少なくな。この間二十八年十月には園原助教授が教授となり、三十年七月には教養部柿崎助教授が本學部勤務となつた。

昭和二十八年大學院文學研究所が開設されるや、矢田部教授は實驗心理學史および理論心理學史を講じ、園原教授は大學院演習を擔當、また知的機能の發達について講じた。このほか大學院の課程として佐藤教授の「意志心理

學」(昭二九)、「比較過程の構造」(昭三〇)、今田惠講師の「アメリカ心理學の發達」(昭二八)、「人格心理學」(昭二九)、「ジエィムズと現代心理學」(昭三〇)などの講義がそれぞれ行われた。

なお二十四年度には醫學部平澤興教授が解剖學を、二十六年年度には醫學部滿田久敏講師が精神病學についての講義を擔當し、二十八、九年度には米國ニューハムプシア大學ヘーズルルード教授がフルブライト交換教授としてアメリカ心理學の傾向について講義を行なつた。またこの間多くの外國文獻がテキストとして使用された。それらは主として雜誌論文であるが、原著のまま使用された單行本の主なものに、ボーリング「實驗心理學」(矢田部)、ピアジェ「知能の心理學」(園原)、マギュー「人間學習の心理」(本吉)などがある。



松本教授

さて以上は、講座創設から現在に至る本講座變遷の概要であるが、すでに觸れたように當初からその補助學科として自然科学研究の必要が感ぜられ、生理學・精神病學の講義が開かれたほか、醫學部足立文太郎教授は人類學を講じ、また心理學研究に數學の素養が必要であるとして、理工科大學和田健雄教授に高等數學の講義を依頼するなどして、當時の新心理學の流れにのり、自然科学的な實證的傾向を尊重した。

初代の本講座擔任であつた松本亦太郎教授の業績ははなはだ多いが、實驗的研究としては、早く精神動作學(Psychokinematics)の成立を主張し、その後獨米諸國において盛んに行われた動作研究の先驅者の一人となつた。なかでも用箸運動の研究は日本人獨特の技能を材料とした獨創的なもので、その後教授のいわゆる練習曲線の諸様式を決定する基となつた。つぎに發生的方面の研究では、從來の學者が主に行なつた幼兒・兒童・青年の研究を多方面にわたつて行なつたほか、さらに老人の心身の狀態に着目し、「現代女子の老人觀」の調査によつて、その後勃

興して来た老人研究の先鞭をつけ、これにより人間の一生を心理學獨自の見地から種種の時期に區分したことは、學問上重要な意義を持つてゐる。教授はさらに個人心理の研究以外に、廣く人類全般、乃至その諸種族の心身の能力の差異、およびその遺傳、教育の諸方面に着眼し、ゴールトンなどの考を繼承して「人間の優劣」、「優良種族の消長」などに向つて研究を進めた。その他藝術に對しても深い趣味と理解を有し、當時設立された京都市立繪畫專門學校の校長を兼任し、京都在住の畫家を統率するとともに、音楽・繪畫・彫刻などの心理學的研究を奨励し、その結果はのちに『現代の日本畫』（大四）、『繪畫鑑賞の心理』（大一五）、『諸民族の藝術』（昭五）などの著となつて現

われた。



岩井教授

つぎに野上俊夫教授は、心身の發育の研究を主とし、青年心理、心身の性別、感情の心理などを講じ、わが國において比較的注意されなかつた米佛の心理學に興味をいただき、「變態心理の諸現象以外に心理學の實驗なし」といつたピエル・ジャンネの言葉に共鳴して、生理學・神經學・精神病學と提携して、具體的な人格の研究に努力することが心理學の最も有效な進み方であると考へてゐた。

岩井勝二郎教授は、はじめ實驗法および數理的處置を専門領域としたが、當時ドイツに起つた形態心理學に興味を向け、その源流であるイギリス心理學をも手がけた。在外研究中ライプチヒの全體主義心理學に共鳴して、ハンス・フォルクェルトのもとで乳幼兒の實驗觀察を行ない、「生後九乃至十二か月の幼兒の種種の形の物體に對する動作」を發表し、歸國後さらにこの種の研究を推進しようとしたが、不幸にして中道で歿した。

矢田部達郎教授は、心理學を極めて廣義における行動學 (Behavioristics) の一種と考へ、とくに種種な行動法則間の相互關係を明らかにしようと努力した。これが昭和二十二年度から三か年文部省科學研究費補助を與えられ

た「行動體制の研究」のテーマである。その成果の一部は雑誌『心理』や『京都大學心理學研究一』などに發表されたが、そこでは異なる行動類型、たとえば知覺・記憶・思考などの間に、極めて平行的な法則が行われていることが認められた。そこでこの法則的共通性および差異性を類似類型の簡單、および複雜諸機能相互間において明らかにしようとしたのが、つづいて二十五、七、八年度に行われた科研補助研究「單一體制と複數體制」であり、同じくこの共通性および差異性を異なる領域相互間において見出そうとしたのが二十九・三十年度の「種種なる課題解決過程の比較研究」である。これらの研究に共通する特徴は、從來の研究結果が個個領域の低次的經驗法則の發見に終始しやすかつたのを、一歩進めて次元の高い綜合的見地にまで引き上げようと努力しているところにある。

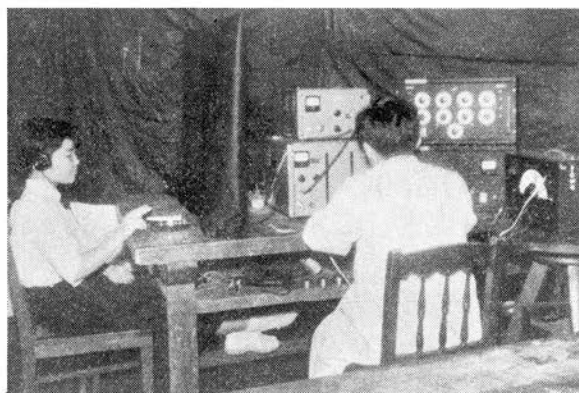
矢田部教授は本學來任後、精神活動論史、あるいは心理學理論史ともいべき前著『意志心理學史』（昭一七）の姉妹篇として、高等精神作用に關する實驗史に相當する『思考心理學史』（昭二三）を公刊、その他『思考心理學』（昭二三・二四）、『兒童の言語』（昭二四）などを著わした。また昭和二十五年以來概論として講義されたものは『心理學序説』（昭二五）として出版され、本講座關係者七名が執筆した『心理學初歩』（昭二六）も矢田部教授の編著として公にされ、わが國の心理學教育に重要な役割を果している。

園原太郎教授は、すでに京都市兒童院に在職中から幼兒の精神發達に關する重要な研究を多數發表していたが、そのもつとも得意とする「空間構造の發達」をテーマとして昭和二十二年から三か年文部省科學研究費補助による研究を行なつた。また二十二年十月には京都府學務課との共同事業として矢田部教授、園原助教授以下が府下小學校六年生全員三六、二三〇名の知能検査と生活時間の調査を行なつた。知能検査については京大式一A検査の劃期的な標準化を完成したが、「學童の生活時間の調査」は園原教授が主任となり、教室全員の協力のもとに『京都大學文學部紀要第一』（昭二七）にその大要を發表した。園原教授はさらに「人格診斷法の綜合的研究」を企て、昭和十六年から三年間科研補助を與えられた。しかしこの計畫はインヴェントリー、ロールシャッハ、クレペリン検査

その他を含み、児童・青年・非行者・精神病者その他を対象とする極めて大きなものであつて、目下その整理完成が着々と進められている。このうち矢田部教授が擔當した「性格自己診断検査の作製」は、完全な標準化と妥當化はまだ残つているが、一段落したため『京都大學文學部紀要第三』（昭二九）に發表された。

このほか最近文部省科學研究費の補助を受けた本講座關係の研究に八木講師の「習慣形成理論の實驗的研究」（昭二二—二四）、「學習成立の諸條件」（昭二五・二六）、本吉講師の「動物の學習における汎化の問題」（昭二九・三〇）などがあるが、八木講師はシロネズミを被験體に使用しまたその後本吉講師などの努力が實を結び、現在では本教室において一〇〇頭内外の純系動物をいつでも準備出来るようになった。また昭和二十六年九月には卒業生張知夫が臺灣から一匹の雌猿を伴ない歸り、なお健在している。

心理學實驗



「心理學讀書會」および「心理學讀書會」に分れ、前者は大學院學生をもつて組織され、後者は廣く專攻者を包含し、ともに十一月に例會を開いたが、間もなく前者は後者に合併され、この心理學讀書會は斷續しながらも今日まで繼

續している。

その後昭和九年一月卒業生有志の間に「京都實驗心理學研究會」が結成され、機關誌として年二回『實驗心理學研究』が發刊されることとなり、この雜誌は遅れながらも昭和十六年まで六卷十二冊を世に送つた。

戰後になつて昭和二十二年九月、特に八木講師の大きな努力によつて雜誌『心理』が發刊される運びとなつたが二十四年六月第五輯を出したのみで惜しくも廢刊となつた。この雜誌は本講座關係の機關誌ではなく、部外者の投稿をも歓迎し、論說・研究・講座の三部門を設けて、一部啓蒙の線をも打出したものであつた。なお二十四年には本講座として“University of Kyoto Studies in Psychology I”を出したが、これは主としてさきの『心理』に掲載された本講座關係者の研究論文の抄録であつたが、世界各國に送られ、かなり大きな反響をよんだ。

つぎに本講座と「關西心理學會」との關係は極めて密接である。すなわち昭和初年「關西應用心理學會」が創設されると、野上教授が會長に選ばれ、本學にその事務所を置き盛んに活躍した。この會はその後戰時中「關西心理學會」と改稱され、應用心理學者のみでなく、關西在住の心理學者一般の會となつた。戰後は毎年春秋二回各地大學を持ち廻つて大會を開催することとされ、二十六年度以降は矢田部教授が會長に推され、今日に至つてゐる。

「日本心理學會」との關係は關西心理學會ほど密接ではないが、初代の會長は松本教授であり、野上、矢田部教授も長く評議員・理事・編集委員として重要な貢獻をなし、現在は園原教授、佐藤教授もともに理事に選出されている。昭和四年にはその第二回大會が本學において開催されたが、その後二十六年ぶりで昨年四月第十九回大會がふたたび本學で開かれ、出席者は千名を超え、發表者は五〇〇名に及んだ。のみならず六〇名の専門家がその専門領域の現状を解説討論するなど空前の盛況を示したが、その講演は『千九百五十五年の心理學』として出版されることになつてゐる。

つぎに國際心理學界との交流はまだ餘り繁くない。昭和二十四年『京都大學心理學研究第一』（英文）が各國に送

られたこと、二十八年十月から翌年六月までフルブライト交換教授として、ハーバムプシア大學ヘーズルロード教授が開講したことは前述したが、このほか二十七年夏には米國コロムビア大學グレハム教授が、本學と同志社大學イリノイ大學の共同主催で行われたアメリカン・セミナーに講師として來朝し、二十二日間にわたり全國から集まつた新進心理學者とともに研究に勵んだ。この催しは國際的のみならず國內の少壯學者の親善交流をも促進した。外國雜誌との關係は、戦前野上教授がマーチソン編集の“Journal of Genetic Psychology”のエディターに推されていたが、最近矢田部教授も同誌のエディターに、また教養部佐藤教授は“Journal of Social Psychology”のエディターにそれぞれ推された。なお同教授は三十年九月からフルブライト交換教授として米國に渡り、サンフランシスコのアメリカ心理學大會に出席したが、日本における多くの資料を携えて渡米し、國際交流に大きな貢獻をもたらした。

倫理學講座

本講座は、明治三十九年文科大學の創設とともに、折學科中の一講座として設置され、最初狩野亨吉教授が擔當したが、四十一年退官後は、友枝高彦助教が受け持ち、ついで桑木殿翼教授が歸朝後本講座を兼擔し、さらに四十三年友枝助教の歐米留學後は、西田幾多郎助教が來任してこれに代つた。しかしその後大正二年八月藤井健治郎教授が來任して、本講座を擔任するに及び、その基礎はいよいよ確立するに至つた。

藤井教授の在任は昭和六年一月まで約十八年の長きにわたつたが、その間の學問的功績は極めて多角的である。その著しいもの二、三を要約するつぎのようにならう。すなわち教授の倫理學體系に對して、その根本にもつとも影響を與えたものはカントの實踐哲學であらう。演習に講讀にカントを講ずるとき、その情熱はいつか學的批

判を越えて奔流するときもがあつた。その後リップスの『倫理學の根本問題』の翻譯があり、晩年にはコーヘンに對して深い同情を感じたようであるが、このような思想方向を一貫して、その胸臆を深く動かしていたものは、カント的人格主義の精神であつた。この藤井教授によつて打ち立てられた學問的傳統は、のち本講座が和辻哲郎、天野貞祐兩教授によつて繼承されて後も、ついに根柢から破られることなく、今日もわが國の倫理學界に光を放つてゐる。

しかし教授はまた單なるカント學徒たるに止まらず、道德の客觀的内容的方面を重視し、倫理學と社會科學との關聯を強調した。これは當時の學界においては先驅的な卓見であつた。さらに教授の倫理學方法論として看過できないのは、倫理學は規範科學でなく説明科學であるという主張であつた。從來わが國の倫理學者はこの學問が單なる事實を取り扱う學問でなく當爲乃至規範を取り扱う學問であるから、これを純粹の規範學としてほとんど疑わなかつた。これに對し教授は規範もまた一つの事實であるという立場から、これを説明學の一種と見、この學的方法論的反省に對し深い示唆を與えた。教授の逝去後『藤井博士全集』八卷(昭七—八)が玉川學園から刊行され、名著『主觀道德學要旨』を始め、多方面にわたる研究論說が收められている。

藤井教授の講義題目(特殊)をつきに掲げる。「正義論」(大三・四)、「社會的道德的制度としての族制」(大五)、「輓近倫理思潮」(大六)、「倫理學と經濟學との關係」(大七—九)、「財產制の倫理」(大一〇)、「近世社會主義の倫理的考察」(大一一)、「社會主義の倫理」(大一二—一三)、「國家の倫理學的探究」(大一四)、「國家の倫理」(大一一五)、「家族制度の倫理」(昭二)、「分配の倫理」(昭三)、「分配の正義」(昭四)、「演習は「カント道德哲學の基礎」(大三)」、「Green, Prolegomena to Ethics」(大五)、「Sidgwick, Methods of Ethics」(大六)、「Kant, Kritik der praktischen Vernunft」(大八一—一〇)、「Schleiermacher, Philosophische Sittenlehre」(大一一・一二)、「Lipps, Ethische Grundfragen」(大一二—一四)、「Cohen, Ethik des reinen Willens」(大一四・一五)、「Scheier, Der Formali-

smus in der Ethik」(昭二・三)、「Spranger, Lebensformen」(昭四)、「Hartmann, Ethik」(昭五)。

このようにして本講座は藤井教授によつてその確固不動の礎石が据えられたが、教授は昭和六年一月逝去した。代つて、大正十四年三月講師を囑託されて以来、同年七月助教となつて藤井教授を助けて來た和辻哲郎助教が昭和六年三月教授に昇任、九年七月東京帝國大學に轉ずるまで約三か年間本講座を擔任した。和辻教授の鋭敏にして的確な直觀的才能と、その豊潤にして藝術的な創造的表現力とが、當時の本學哲學科新進の若い學徒に非常に大きな精神的波動をよび起した。教授の本學在任中の業績としては、まず日本精神史の研究が、漸次その原流にまで



和辻教授

遡及されて、中國・印度の思想史にまで及び、それがついに「原始佛敎の實踐哲學」(昭二)として結實するに至つたことがあげられ、つぎに從來の哲學が主として人間の存在の時間性の側面にのみ注目する傾向があつたのに對し、その空間性に着目し、環境の主體的性格、とくに主體的風土の問題を哲學の中心問題の一つとして導入し、この方面に一新紀元を劃したこと、人間存在の原本的社會性に注意し、「人間の學としての倫理學」が、單なる個人内面の良心の問題を超えた歴史的社會的な「間柄」的關連の問題であるべきことを強調したこと、およびその廣い精神史的視野と、鋭い文獻學的分析力をもつて日本道徳思想史の新分野を開拓したことなどであろう。これによつて日本道徳思想は日本民族の廣い文化史的思想史的連關のもとにユニークな照明を受けることとなつた。和辻教授が學生に對してつねに強調したことの一つは、日本人はみずからの歴史と傳統とを尊重し理解すべきであるということであつた。これは當時の哲學および倫理學專攻生が、概して西歐哲學には深い關心を示すが、日本の文化・思想に對しては、かえつて無關心であつた風潮に對する頂門の一針であつた。和辻教授の特殊講義の題目は「國民道徳論」(昭六)、「人間の諸規定」(昭七・八)、演

著『Kant, Kritik der praktischen Vernunft』(四六)、『Fichte, Das System der Sittenlehre』(昭七・八)、『Lévy-Bruhl, La morale et la science des moeurs』(四六)、『Hegel, Grundlinien der Philosophie des Rechts』(昭九)であつた。

ついで天野貞祐教授が、和辻教授の東大轉任の後をうけて、哲學哲學史第四講座から轉じて、本講座を擔任するようになつたのは昭和十年三月であつた。天野教授は元來カント哲學研究の權威であり、その第一批判の名譯は、つとに難解な本著作の讀解に必須の文獻であつたが、さらに教授のカント實踐哲學の根本精神である倫理的ヒュー



天野教授

マニズムに對する深い共鳴は、その學問的立場を根本的に特徴づけるものであつたといえよう。そしてさらに重要なことはそれが教授の學問的特質であつたのみならず、その人格的背骨を形成したことである。

このようにして本講座はこの學問の本質の一面である實踐的情熱の主体性を獲得して、さらに新たな出發を始めることとなつた。天野教授の背骨たるヒューマニズムの合理主義の精神は、現實の不合理と醜雲をそのまま第三者的に傍觀し看過することを許さず、ついに筆を驅つて、

『道理の感覺』(昭二)、『學生に與ふる書』(昭一四)、『道理への意志』(昭一五)などの諸著を相ついで公刊するに至つた。これらがわが國の青年知識層の純粹な魂の上に、いかに大きな感激の波紋を呼び起したかは何人も知るところであろう。哲學的眞理が單に客觀的體系の眞としてのみ把握されるものでなく、深く行爲的個體の主體的眞實の中を含むものとして把握されなければならないことを考えるならば、教授のカント哲學に對する態度は、まさにこの眞理の人格的把握のいかなるものかを教えるであろう。教授のヒューマニズムは、一面道理の力の不動の確信に基く嚴しさを含むと同時に、他面豊かな人間性の完成を強調する柔軟性を特質とし、同時にそれは人間性の擔い

手としての各個人の自律性と、單に手段としてのみならず、目的としての個人の絶對的價値を強調する個人主義を必然的に伴なう。しかるにこのような近代的ヒューマニズムと個人主義は、戦前の軍國主義的、國家主義的日本社會と本質的に相容れぬことは明白で、教授の立場は一面普遍的人間理性の立場であるとともに、他面民族の文化と傳統を尊重するが、しかしそれは文化的倫理的立場に終始するが故に、當然現實的政治的不合理と衝突せざるを得なかつた。とくに滿洲事變以後のわが國における軍部勢力の擡頭と、それを支持する右翼的國家主義の勃興は、教授をして祖國の前途に深憂をいだかせ、昭和九年における高田保馬教授との貧乏論の應酬はその時流に追従しない高邁な識見の一表明であつた。さらに昭和十三年には『道理の感覺』中の軍事教練に對する批評が、反軍思想であると軍當局を刺戟し、大學と軍部との間に紛争を惹起するに至つた。當時は濱田耕作教授の總長時代で、天野教授は總長の懇請により學生課長に就任していた。濱田總長は教授を深く信頼支持するとともに、教授も自説の正しさについて強く信ずるところがあつたが、結局右著作の自發的絶版という處置は、總長の毅然たる態度と、當時の本學配屬將校川村大佐の理解ある處理と相まつて、事件を圓滿解決させた。しかし教授のヒューマニズム的人格主義的信念は、その獨白の祖國愛とともに、戦前戦後變轉極まりない世相の中にあつて、終始一貫してついに變るところがなかつた。

天野教授は「自由の問題」(昭一〇)、「人格論」(昭一二)、「徳目について」(昭一二)、「意志自由の問題」(昭一三・一四)、「人倫の形而上學試論」(昭一五)、「同情の倫理」(昭一六)、「良心に就いて」(昭一七)、「ヘーゲル法哲學考察」(昭一八)について特殊講義をし、演習は「Hegel, Grundlinien der Philosophie des Rechts」(昭一〇—一二)、「Kant, Kritik der praktischen Vernunft」(昭一三・一四)、「Hegel, Grundlinien der Philosophie des Rechts」(昭一五—一七)を讀んだ。

天野教授は昭和十九年十一月停年のため退官し、代つて二十一年三月に島芳夫助教授が教授となつて本講座を擔任し、以來今日に至つてゐる。島教授は昭和十一年講師、十六年助教授に任ぜられて講義を續けていた。すでに和辻教

授の倫理學の主要傾向であつた倫理學の人間存在論的基礎付けは、ヨーロッパの十九世紀から今世紀にかけて顯著な、傳統的觀念論に對する生の哲學や實存主義の擡頭との關連において位置づけられるが、島教授の方法にも同様な傾向が著しい。教授は正統哲學が餘りにも合理主義的であり、人間の情意生活とその道德生活との關連を輕視することに不滿を感じ、とくに感情生活の本質の究明に専心した。以來教授の主要研究テーマの一つは、理性の論理と感情の論理の相互關係であるが、それは單なる非合理主義を立場とするものではなく、むしろ情意生活自體に内在する理性の機能の把握を強調する。つぎに教授の關心の對象となつたものは倫理學と社會科學との相互關係である。教授は、早くから社會問題に興味をいだき、倫理と經濟との關係について一連の研究を發表して來たが、それと關連してデュルケイム學派の道德社會學の研究方法与業績に注目し、道德哲學と並んで實證的倫理學の位置づけを試みた。

島教授は「倫理學概論」を講義として講ずるとともに、最近の研究には「市民社會の倫理」(昭二六・二七)、「近代倫理の形成」(昭二八)、「近代道德の形成」(昭二九)、「啓蒙時代における倫理思想」(昭三〇)、「近代思想史に於けるヒューマニズムの問題」(昭三二)などの題目が掲げられている。また昭和七年以來西谷講師「道德に於ける自然と歴史」(昭七)、高山講師「ヘーゲルの法律哲學」(昭八)、「社會と倫理」(昭一〇)、高坂講師「カントの倫理學」(昭九)、室田講師「國民思想とその發展」(昭二〇)、坂田講師「戰國武士の意識形態」(昭二二)、「封建組織と封建意識」(昭二三)、「明治道德史」(昭二九)、田中講師「實存的倫理の諸問題」(昭三三)、保田講師「古代支那思想の倫理學的考察」(昭二四)、「古代支那に於ける人性説の研究」(昭二五)、「墨子に見られる哲學的諸問題」(昭三〇・三一)、岸畑講師「ヘーゲルに於ける人倫の問題とその發展」(昭二七)の協力を得ている。演習ではカント第一・第二批判、ヘーゲル法哲學、シェリング自由意志論、ミル功利主義などが讀まれている。

なお本講座に關係する學會としては、「倫理學會」が、本講座關係者によつて明治四十二年十月成立したが、四十三年十月には桑木教授が哲學および倫理學講座を併せて擔當し、研究室も合同したため、哲學科關係者とともに

「哲學・倫理學研究會」として組織された。大正二年藤井教授が來任し、翌年桑木教授が轉任した後は、西田幾多郎教授、朝永三十郎教授が受持つたが、學會の組織に變化なく、三教授出席して學生を指導した。のち大正十年ごろから兩者分離して倫理學専攻生のみの「倫理學研究會」となつた。本會は藤井、和辻、天野、島各教授の指導のもとに今日に及び、毎月一回例會の原則が、現在では年間四・五回に改められてはいるが、なお眞摯な研究發表が繼續されている。また別に、昭和六年春から學生の間に「倫理學讀書會」が生れ、例會が研究室で開かれたが、この會も現在島教授、保田助教授の指導によつて、毎週土曜午後演習室でテキストを中心に、自由な討論の形で續けられ、主として學生相互の琢磨に大いに資している。

また戦後における道徳倫理の研究指導機關設立の要望に應えて、昭和二十五年十月組織された「關西倫理學會」の會長には、島芳夫教授が選任され、同年發會した日本倫理學會（會長和辻哲郎）とともに、社會一般の情勢に即應しつつ、倫理學研究の發展に寄與している。本會はとくに地方學會としての特色を發揮し、日本倫理學會が年一回の大會をもつのみであるのに對し、年一回の總會・學會および春秋二回の研究會を催して研究の成果を發表し、自由活潑な討論が試みられている。研究會は、そのうち一回を京都・大阪を離れた地方大學で開き、大いに啓蒙の役割をも演じ、そのつど會報を編輯して會員に配布しているが、倫理學の研究に清新の氣を注入するものとして、その活躍は地味ながら、着實な成果を収めている。

美學美術史第一・第二講座

本講座の開設は明治四十二年五月であるが、のちに本講座を擔任した深田康算教授は當時なお歐洲に留學中であつたので、心理學講座擔任の松本亦太郎教授が本講座の事務と學生の指導に當り、西洋文學講座擔任の藤代禎輔教授

が美學の講義を擔當、美術史は武田五一講師が明治四十年九月から西洋美術史を、瀧精一講師が四十二年二月から日本美術史概説をそれぞれしばらく講じた。またその研究に資し、併せて本講座開設を記念するため、四十二年五月諸方に東洋古名畫の出陳を請うて、本學圖書館および尊攘堂において展覽會を開催した。同年九月からは濱田耕作が講師となり、以後普通講義として日本美術史を講じ、瀧講師はこれと並んで日本美術・宋朝繪畫などに關する特殊講義を毎年一回集中的に開講し、とくに四十五年度の日本繪畫史の講義は廣く學外一般にも公開された。

明治四十三年秋歸朝、直ちに教授となつて本講座を擔任した深田教授は、以後毎年普通講義として美學概論を、

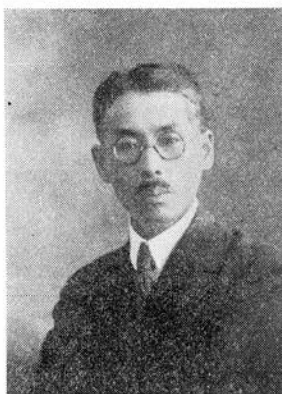


深田教授

特殊講義として「希臘美術史」(明四四)、「伊太利亞文藝復興時代美術史」(大元)を講じ、演習にはカントの「判斷力批判」(明四三・四四)、「造形藝術」(大元一三)などの研究を指導した。大正二年以後普通講義は、美學概論のほかに、西洋美術史概説を加えて同十年に及び、特殊講義には「近世美術史」(大二)、「藝術學方法論」(大三・四)、さらに六年から八年にかけては藝術批評史を講じ、演習の指導はカント「判斷力批判」(大七・八)、レッシング「ハンプブルグ戯曲論」(大一〇・一三・一四)などによつた。大正二年濱田講師は考古學研究のため歐洲に向い、日本美術史の講義はしばらく中止されたが、代つて八年八月來任した澤村專太郎助教が、普通講義として以後日本美術史概論を、また特殊講義として「印度上代佛敎美術」(大一〇・一一)を講じ、十二年三月には在外研究員として歐洲に赴いた。また植田壽藏講師は大正八年から「西洋近代繪畫」(大八・九・一一)、「北歐の繪畫」(大一〇)、「伊太利亞文藝復興期の美術」(大一二・一三)などを講じていたが、十一年二月助教教授に任ぜられ、ついで十四年五月には植田助教も在外研究員を命ぜられたので、工學部天沼俊一教授が授業擔當として、「日本建築史」を講ずることとなつた。

この間、深田教授は普通講義に美學概論を、特殊講義には大正十四年から昭和二年にわたつて近世美學史を講じ、演習にはヴェルフリン「美術史の基礎概念」を用いて指導を續けたが、昭和二年十一月病をえてふたたび起らず、本講座擔任十八か年にして、翌年十一月逝去した。

深田教授は『藝文』・『哲學研究』などの學術雜誌、その他に多數の論文を發表し、美學史上に顯著な學說、もしくは諸問題に關する周到な紹介批判を通じ、また諸藝術の、ことに西洋文藝に關する造詣の深い考察を通じて、精細明快な独自の美學理論を形成した。これらの論文は輯められて、その後『深田康算全集』四卷(昭五・六)として刊行されている。



澤村教授

大正十五年一月、澤村助教授は在外研究を終えて歸朝し、普通講義に「日本美術史概論」を、特殊講義に「支那佛教美術史」を講じ、昭和二年以後は「大和繪史論」を續講したが、同四年十二月大阪に病み、翌年五月教授に任せられるとともに逝去した。澤村教授は本學に來任する以前、多年東京國華社において美術研究雜誌『國華』の編輯に従い、その間およびそれ以後も、多くの論文を同誌その他に發表した。主として日本繪畫史の遠く上代から近代に及ぶ諸問題、さらに印度・中國・西域などの美術に關し、いずれも特色豊かな研究を發表した。これらの研究の主要なものは『日本繪畫史の研究』(昭六)、『東洋美術史の研究』(昭七)に收められた。昭和二年十一月植田助教授は在外研究を終えて歸朝し、ただちに九州帝國大學教授に任せられたが、翌年七月本學講師を囑託され、短期間に美學序論を講じた。ついで深田教授逝去の後をうけ、昭和四年四月本學助教授に任せられ、ついで七年五月教授に昇任、本講座を擔任し、以後毎年普通講義として美學序論を講じ、特殊講義には「美の類型」(昭四)、「美學美術史方法論」(昭六)、「藝術の類型」(昭八)、「藝術作品の偉大性」(昭一一)、「美に於ける

形象と超形象」(昭一三)、「藝術批評論」(昭一五)を論じ、また「佛蘭西の美術」(昭五)、「伊太利亞文藝復興期の繪畫」(昭九・一〇)、「日本美術に於ける美の諸形態」(昭七)、「日本美術の美學的硏究」(昭一二)、「墨畫の硏究」(昭一四)、「日本藝術精神の硏究」(昭一六)を講じ、演習においては、カント、リップス、ウティッツなどの美學書の研究とともに、廣く美學・藝術に関する硏究を指導した。

その間、昭和六年には福井利吉郎講師が「繪卷物概説」を集中講義し、須田國太郎講師は「希臘彫刻史」(昭七・八)、「パロッコの繪畫」(昭一一)を、源豊宗講師は「藤原時代の美術」(昭九・一〇)、「日本彫刻史」(昭一一)、「鎌倉時代の美術」(昭一二)、「大和繪の展開」(昭一三・一四)、「日本近世繪畫史」(昭一五・一六)を講じた。また昭和十年度には中井正一講師が、「藝術に於ける主體性の問題」を論じ、昭和十二年以後は井島勉が講師を囑託され、「美學思想の發展における希臘美術と中世美術」(昭一二)、「藝術の歴史と批評との關聯」(昭一三)、「藝術史的類型の成立」(昭一四)、「藝術に於ける理念と自然」(昭一五)、「藝術的創造」(昭一六)をそれぞれ講義した。

戦時中も植田教授は、普通講義として「美學序論」、特殊講義として「たけ・いうげん・さびの關聯」(昭一七前)「日本諸藝術における美の構造」(昭一七後)、「美の高低」(昭一八)などを講じ、演習も指導した。さらに井島講師は十七年度「藝術と民族」、「言語藝術と視覺藝術」を講じたが、十八年五月助教授に任ぜられ、「藝術の史的發展」(昭一八)、「藝術史學の根本問題」(昭一九)などを特殊講義として行なうとともに、その間學生の學力低下を防ぐために課外としてモイマン「現代の美學」、シュリング「自然と藝術との關係」、ヘーゲル「美學講義」などの講義を行なつた。なお源講師は十七年度前後期引き續いて、「日本の南畫」、「室町時代の美術」を講じたが、十八年度からは新たに上野照夫講師が、同じく特殊講義として「亞細亞に於ける印度美術の位置」(昭一八)、「印度美術と南方美術の關聯」(昭一九)、「彫塑論」(昭二〇)などを行なうことになつた。

植田教授は、昭和二十一年七月停年により退官、翌年名譽教授の稱號を授けられたが、二十一年度に限つて學部

の懇望を容れ、講師として美學序論の講義を擔當した。教授は美術の歴史的・理論的研究から進んで、一般藝術の本質とその根源を研究し、これに基き藝術研究の意味、その方法そのものの研究に入り、東西美術の美學的研究によつて、それに特有な美學的理論を展開した。とくにその犀利な美術理解と独自の美學體系に基き、藝術の自律的原理を確立し、さらにそれによる藝術の自律的研究方法を樹立したことは、わが國の美學史上に不滅の功績を印したといえよう。それらの研究は、『藝術哲學』(大二三)、『近代繪畫史論』(大二四)、『藝術史の課題』(昭二〇)、『日本美術』(昭一五)、『視覺構造』(昭一六)、『日本の美の精神』(昭一九)、『美をきわめるもの』(昭二二)、『佛敎美術論』(昭二二)、『美の批判』(昭二三)、『文藝の存在』(昭二四)、『ゼザンヌ



植田教授

以後』(昭二四)、『近代の繪畫の方向』(昭二六)、『西洋美術史』(昭二八)、『傑作と凡作との論理』(昭二九)、『藝術の論理』(昭三〇)などの諸著作として發表されており、なお現に叢録として新しい著述を續けている。

戦後、授業態勢もほぼ平常に復した二十一年度の講義は、前述のような植田講師の講義のほか、井島助教授の「美の背景と周邊」、および上野講師の「日本彫刻の諸流派」の研究、井島助教授の演習が設けられ、翌年度は井島助教授の講義「美學序論」、研究「藝術史學論」、演習「美學の諸問題」、新に島田脩二郎講師の「宋朝の繪畫」が加えられた。か、上野講師の「天平彫刻の諸問題」と、新たに島田脩二郎講師の「宋朝の繪畫」が加えられた。

井島助教授は、二十二年四月教授となり本講座を擔任することとなり、以後毎年講義として美學序論を講じ、演習として美學の諸問題について學生の研究を指導するほかに、研究として、たとえば「美の類型」(昭二三)、「藝術史論」(昭二五)、「西歐藝術思潮研究」(昭二七)、「藝術における現象と本質」(昭三〇)、「藝術作品と作風の問題」(昭三一)などの題目で毎年講じ、また二十七年度まで演習としてカント「判斷力批判」の指導を行なつた。さらに

上野講師も二十六年教養部教授に任ぜられたが、研究として「印度美術史概論」(昭二三)、「日本美術と佛教」(昭二五)、「西域の美術」(昭二七)、「繪巻物研究」(昭三〇)などを講じ現在に及んでいる。

その間美學美術史の諸分野にわたつて毎年講師を囑託し、二十三年には土居次義講師の「日本近世初期の繪畫」、二十四年には須田國太郎講師の「ルネッサンスからバロックへ」、二十五年には張源祥講師の「音樂美學概説」、十六年には佐和隆研講師の「日本佛教美術史」と吉川逸治講師の「西歐におけるロマネスク美術」、二十七年には源豐宗講師の「日本美術史」と竹内敏雄講師の「文藝學概論」、二十八年には源講師の「日本近世美術」と吉川講師の「中世西歐繪畫」、および河本敦夫講師のシラー「美學論文」演習、二十九年には蓮實重康講師の「天平的なものより弘仁貞觀的なものへの美術史的展開」と吉川講師の「近世西歐美術史」、および野村良雄講師の「音樂史上の諸革命」、三十年には島田講師の「宋代の文人畫論と文人畫」、吉川講師の「西歐近世美術」、新規矩男講師の「西洋古代美術史」、および金田民夫講師の「判斷力批判」講讀が行われ、さらに本年度も河本・吉川・新各講師の研究のほか教養部の梶野辰助教が講讀を擔當している。このように非常勤講師の交替が頻繁であるのは、専攻學生の激増とその志望部門の多様性、および本講座に包括されるべき分野の複雑性などの事實に即應するためである。

なお昭和二十八年四月から開設された大學院文學研究科には、美學美術史・東洋美術・西洋美術の三科目を包括する獨立した美學専攻が設けられ、これに對しては毎年井島教授が演習を設けてその研究を指導するほか、學部における研究のあるものを大學院と共通の講義に指定し、別に文學研究科學生の専攻分野の實情により、學部における他の研究の聽講および單位取得を許可することにしてゐる。

以上のように本講座は深田・植田兩教授の後をうけ、現在井島教授の主宰するところであるが、教授は植田教授の學風を繼承し、美學史の研究から出發して、美術、ことに西洋美術に関する研究を參考しながら、哲學的美學の理論的研究を深め、獨自の體系樹立に努めているが、その業績は『ギンケルマン』(昭一一)、『藝術史の哲學』(昭一

九、『藝術の創造と歴史』(昭二一)、『ヨーロッパ藝術』(昭二四)、『藝術とは何か』(昭二五)、『美術教育の原理』(昭二六)その他の著書論文に窺うことができる。さらに教授は昭和三十年度の在外研究員として文部省から海外出張を命ぜられ、三十一年三月歐米各國の美術館・美術研究所の視察調査に赴いた。

なおここで附記すべきは、美學美術史第二講座の増設である。さきにもふれたように、本講座はそれに包括される分野が複雑であり、近年は専攻學生も多くその志望部門の多様であることから、その運営は従來の一講座のみでは極めて不完全であることが痛感され、本學および本學部はその第二講座増設を急務と認め、ここ十數年來繼續して政府當局に申請していたが、ようやくそれが認められ、本年四月から第二講座が増設され、目下陣容を整えて將來への發展を期している。

本講座の卒業生は、僅少の選科修了生を併せ、現在一八〇餘名を數える。明治四十二年一名の第一回卒業生(のちの澤村教授)を出して以來、明治大正年間には毎年一、二名を數えるに過ぎなかつたが、昭和に入つて次第に増加し、昭和六年度には一〇名、同七年度には一四名を出したが、これはむしろ異例である。戦時中にはふたび減少して例年一、二名となり、戦後に至つて急激に増加した。終戦前三十七年間の卒業生數約一〇〇名に對し、戦後十年間ですでに八〇名を超えている。これらの卒業論文題目を通じてみると極めて雑多であるが、一應種類別に概算すると、藝術史方法論を含む美學理論に関するものが、九〇篇を超えて半数を占め、つぎに文學に関するもの約二五篇、日本を含む東洋美術に関するもの二〇篇、西洋美術に関するもの一〇篇餘であるに對し、音樂に関するものが二〇篇に近く、また映畫・演劇・舞踊に関するものも約二〇篇を數えることができる。とくに戦後の傾向についてみると、やはりその種類は豊富であるが、美學理論に関するものが比較的多く、中でもカント美學に関する研究がことに多數を占め、現象學的美學關係がこれにつき、存在論的美學やフランス美學に関するものも現われている。また東西美術史に関するものよりも、映畫・演劇關係が多いのは最近の顯著な傾向であり、他に文藝・音樂・

舞踊に関するものもある。なおこれら卒業生は、あるいは本學を始めとする全國諸大學の美學美術史關係の教壇に立ち、あるいは博物館・美術館・放送局などに勤務、またわずかながら畫家・小説家・音楽家・映畫監督として立つ者もあり、近年に至つては新制高校などの教職に就く者も増加している。

つぎに本講座に關係する學會について觸れておこう。京都大學の「美學會」は明治四十一年三月、當時の本講座に關係した人たちが相互の研鑽に裨益することを目的として組織したもので、月次例會を開いて教授その他の先輩に講演を請い、時には會員が自己の研究成果を報告し相互に検討を加えた。最初二年間には藤代教授が「シルレルの美學」、松本亦太郎教授が「支那畫の筆法」、米田庄太郎講師が「最近伊太利の美學」、濱田講師が「鎌倉時代の美術に就て」、武田講師が「建築物の實測法」などについて發表し、植田教授もそのころ「カント氏以來當今に達する獨逸美學の推移に就て」述べているが、明治四十四年以後は深田教授も演壇に立つた。その後大正四年「京都哲學會」の創設に伴ない、美學會もこれに綜合され、美學に關する研究發表も一時京都哲學會の例會、または大會の一部として行われるようになったが、大正十二年十一月からはふたたび美學會の單獨例會が復活され、その第一回例會には深田教授以下八名が學生集會所に參集し、學生の發表を中心に研究討議した。以來この例會は繼續的に開催され、ことに植田教授就任以後は活潑となつた。主として樂友會館を會場に、卒業生の研究發表を中心として討議が行われたが、戦時中に至つて衰微し、戦後はつぎに述べる全國的な組織による美學會の諸行事に重點が移されたため、本會單獨の學會的活動は不振を餘儀なくされながらも存續し、現に一三〇回近くに及んでいる。

なお昭和五年六月には別に主として在學生の讀書研鑽の結果の報告を目的として「美學讀書會」が創められ、植田教授を中心に比較的若い大學院學生と學部學生が會した。この會も十餘年にわたり、活潑に續けられて來たが、戦争とともに不況を來たし、戦後は教室における演習が實質的にこれと代るようになった。

美學美術史研究者の全國的組織としての美學會設立のことは、昭和二十四年秋の井島教授と東京大學竹内敏雄教

授の會談に端を發し、本學および東京大學が中心となつて學會の組織、運営の方針を協議し、從來から存した前記京都大學美學會と東京大學美學會が合同して母體となり、その發起のもとに全國主要大學に勧誘してその參加を求め、ここに全國的學會としての「美學會」が創設された。會は二十餘名の委員制により運営され、二十五年三月以後季刊誌『美學』が發刊されており、また便宜上東海地區以東を東部會、近畿地區以西を西部會と稱し、兩部會はつねに連携を密にしなから、おのおの独自の企畫により運営することが基本方針とされ、西部會は本講座を中心として運営されている。すなわち二十五年六月醍醐寺三寶院を會場とし、第一回研究發表會が西部總會および所藏美術品見學を兼ねて開かれてから、今日まですでに二二回の研究發表會が重ねられたが、會場も本學のみに限らず、また發表者も西部會所屬各大學關係者を網羅する方針がとられている。なお美學會は本學の主唱により毎年一回全國大會を開催することが協議され、その第一回は二十五年十一月、三日間にわたつて京都を會場に行われたが、このように全國の美學研究者が自發的に一堂に會して學會の行事に参加したのはこれが初めて、わが國美學界に寄與した意義は重大である。この全國大會は、その後東西兩部會が交互にその責任を負うこととなり、その中第三回（昭二七）と第五回（昭二九）は西部會が事務を擔當し、本學を主な會場とし、時には美術史學會、あるいは音樂學會と共同連携して盛大に行われた。なお美學會は日本學術會議の主宰する哲史文學會連合に屬し、また關係諸學會とともに藝術諸學會を組織し、他學會との協調を圖つて來たが、井島教授は美學會から選出された評議員および委員として、それに參畫している。

また、昭和二十六年には「日本美術教育學會」が組織され、翌年七月本學西部講堂でその發會記念會が開催された。この會は全國小中學校・高等學校・各大學の美術教育關係教官の發案により、それらの人びとを會員とするが、當初から本研究室の指導援助が求められ、井島教授はその請いによつて會長に就任、現在に至つてゐる。この會は美術教育關係者の理論的學識を涵養することを目的として設立され、機關誌『美術教育』の發行と毎年一回の學術

研究全國大會、および隨時各地に研究集會を開催することを事業としているが、『美術教育』は今日まで三五號に及び、毎號井島教授の論説を掲載し、四回にわたつた全國大會も本學を中心に開催されて來た。

宗教學第一講座（宗教學）

わが國における宗教の學的研究が、明治時代の西洋學術移植の進展とともに始まつたことはいうまでもない。しかもその機運は大體に佛教關係の人びとから起つた。初期の基督教關係の人びとが、宣教およびそのための教化運動を主としたに對し、佛教關係の先覺者は、西洋的研究法を通じて、新時代に適應する力を佛教に與えようとし、そこから宗教哲學の萌芽と、後には比較宗教學的研究への關心が發生して來たというのが大體の事情であらう。

本學では、明治四十年一月から三月にかけ來朝中のエル大學ラッド教授を招請し、正科目として宗教學の講義を開いた。ついで同年五月本講座が設置され、右のような一般情勢のもとに、松本文三郎教授の兼擔により九月から開講された。松本教授のもとに、蘭田宗惠講師は日本支那佛教史を、ギューリック講師は基督教教理史を講じ、四十三年からは西田幾多助教授が演習を擔當し、ヘフディング、シュライエルマッヘルなどを讀んだ。

このように第一期の本講座は、松本教授の多方面な學殖を中心として、東西兩洋の諸宗教に跨がる性格をもつていた。その後大正二年松本教授兼擔を免ぜられて、西田教授が最初の本講座擔任となつたが、翌年には哲學講座に轉じて、ふたたび松本教授の兼擔となり、その間朝永三十郎教授はカント以後の宗教哲學について特殊講義を行ない、また三年にはギューリック講師に代り、日野眞澄講師が基督教教理史や同經典論の講義を續けるなど、種種の變化はあつたが、その包括的な性格は依然殘された。それは當時の學生の研究や「印哲・宗教學會」にも反映した。すなわち學生の研究題目は、カント、シュライエルマッヘルなどの宗教哲學、宗教心理學的・宗教社會學的・

宗教哲學的な諸問題、佛教や基督教における特殊題目など多彩を極めた。また「印哲・宗教學會」は、明治四十四年三月松本教授指導のもとに創立された「宗教學會」が、翌年九月「印哲學會」と合同成立したもので、同様に多方面な研究發表と活潑な論議により、初期の文科大學の有力學會の一つとなつていた。

當初の本講座は包括的普遍的性格をもつていたが、大正初期ごろから一般的にも、また本學の宗教研究者達の間にも、次第に佛教・基督教・經驗的宗教學などの特殊領域にその研究を集中する傾向が現われ、同時に宗教研究の眼目ともいふべき宗教哲學においても、從來より一層透徹した研究に前進すべき必要が現われた。ちょうどそのころ大正六年十二月波多野精一教授が來任し、本講座は、その第二期に入



波多野教授

つた。もともと宗教哲學はその成立において、西洋近世における哲學の神學からの解放、およびその興隆と關連しており、とくに哲學の立場の深化が行われたドイツ哲學において、一時の頂點に達したものである。波多野教授は、早く『西洋哲學史要』(明三四)、とくに學位論文「スピノザ研究」においてその哲學史的洞察を示し、また當時のドイツ宗教史學派の業績に基いた名著『基督教の起源』(明四一)によつてこの方面の學殖を現わし、またその後の『西洋宗教思想史 希臘の卷第一』(大一一〇)に一端を現わしたようにギリシア古典への造詣をもそなえたすぐれた學者であり、當時のわが國の宗教哲學を荷ない、新しい本質的な前進をさせることのできるほとんど唯一の學者であつた。教授の就任により經驗的宗教學よりも、むしろ宗教哲學の研究を建前とする、諸大學にみられない特色をもつ本講座の方向が確立された。

就任當初の波多野教授は、カントの批判主義の立場をとつたが、それは大正九年に著わされた『宗教哲學の本質と其根本問題』のうちに、透徹した明晰さをもつて展開され、その著はわが國一般哲學界における批判主義的時期

の代表作となつた。そこでは理性に基く宗教の一般的本質が、歴史的な種種の特殊宗教に即して、それらに内在する實現さるべき目的、あるいはそれらに對して規範たるべき價值として捉えらるべきであるとの主張が基調をなしている。そしてそれに對し、主理主義的形而上學と超自然主義との、二つの誤つた立場が對比されている。前者は理性に立脚しながら、しかも理論的に構成された神概念を、宗教的に體驗される絶對的實在としての神に置きかへようとするもので、後者は歴史的な宗教事實に立脚しながら、しかも自宗教のみに固有な啓示を認識の根源とみなし、その普遍妥當性を要請しようとするものである。

講座内部では、波多野教授は特殊講義として歐洲宗教思想史、原始基督教、またはその神學思想などについて講じ、藺田講師が大正九年に去つて後は、日野講師がもつばら基督教關係の講義を續けた。昭和二年以後波多野教授は宗教の本質、のちにはプロティノスの宗教哲學を主題とする特殊講義を行ない、日野講師に代つた山谷省吾講師が毎年原始基督教に關する講義を續けた。演習にはカント、シュライエルマッヘル、ヘーゲルなどの書が用いられ、ギリシア哲學の古典も別に講讀された。

學生の研究題目も、もつばら西洋近世および現代の種種な宗教哲學説や基督教神學の研究、乃至は宗教の根本的な諸觀念の檢討に集中されるようになり、學會も次第に印哲と分離して、獨立に茶話會を開くようになった。なお昭和十年三月には西谷啓治講師が助教授に任ぜられ、宗教哲學の基礎的諸問題について講じ、またカントを講讀した。

波多野教授の圓熟した思想は、昭和九年に著わされた『宗教哲學』のうちで、「徹底的象徴主義」という特色ある立場を展開した。それは世界、すなわち一切の存在や事實が、表現を超越するような絶對的實在者たる絶對他者の表現として體驗されること、そしてこのように事實が直ちに象徴であるという意味での象徴の唯中に生きること、宗教的態度を認める立場である。しかも一切のものの徹底的象徴化は、聖なる愛（アガペー）における絶對他

者との人格的な、もつとも實在的な共同において、時の眞中に超越的な他者が「あなた」から將來し、自らを啓示するところの、すなわち將來（他者）が現在（主體）との共同に入り来る「將來の現在性」としての永遠とそこに成り立つ信仰の立場とにおいてのみ完成される。この宗教本質論はさらに典型論と結合する。すなわち實在する神、「力」の神、「眞」の神という典型的なもろの立場が遍歴され、それぞれの一面性が批判されながら、それらのもつ積極的意義が、「愛」の神との人格的交りの立場に止揚される。本質論においては、たとえば、オットーの「絶對他者」の觀念などに現われている新しい思想傾向からの影響と、その傾向を辯證法神學などにおける異なる方向へ展開しようという意圖とが現われ、典型論においては歴史的研究の蘊蓄が現われている。

教授の晩年の講義は學生に深い感銘を與えたが、昭和十・十一年度の演習にはヘーゲルの歴史哲學講義が用いられ、十二年度には特殊講義としてパウロのローマ書が講解された。ヘーゲルの演習では、かれの歴史哲學に關説して、教授の抱懐する歴史的認識に對する見解が示され、またしばしばヘーゲルの宗教哲學に對する洞察にみちた批判が行われた。とくにヘーゲルのギリシア精神の本質の哲學的解明に對して加えた教授自身のギリシア觀には、そのギリシア精神史に對する積年の蘊蓄の結論が傾け盡された。また最終の講義「ローマ書の解釋」のはじめに當つては、その著『基督敎の起源』以來の教授の多年にわたる原始基督敎研鑽の經歷を回顧し、ヨーロッパの宗教史學派の諸業績から與えられた感銘と影響が述べられた。しかしこの講義は當時の教授の健康状態のためわずかにローマ書の二章に入つたのみで、教授は十二年七月停年退官することとなり、十一月名譽教授の稱號を與えられた。教授の門下生はその選曆を記念し、『哲學及び宗教とその歴史』（昭一三）と題する獻呈論文集を贈つて、その健康を祈つたが、幸い恢復し、その後『宗教哲學序論』（昭一五）、『時と永遠』（昭一八）を世に送り、『宗教哲學』ともいわれる波多野哲學の三部作を完成した。

波多野教授退官後、西谷助教教授は昭和十八年七月教授に昇任、本講座は一轉機を迎えた。その後本講座は紆餘曲

折の運命に遭遇しなければならなかつたが、その根本の精神と研究の方向においては現在に至るまで一貫したものをもち、いわばこの期を第三期と稱することができる。この期の研究の特色は、まず第一にふたたび総合的普遍的研究への關心が著しく増大したことである。わが國の宗教研究は普遍的傾向から特殊的研究の分化に進み、その方向はますます深化している。本學部においてもこの動向を反映し、基督教學講座および佛教學講座がそれぞれ宗教學第二・第三講座として分立したが、このような特殊研究の發展は、反面必然的にこれらの研究に立脚した総合的普遍的研究の必要をよび起すものであつた。総合的普遍的の研究とは、それぞれの特殊宗教の本質を生かしながら、それら獨自の個有性をその方向にますます徹底化することにより、かえつてそれを内面から突破し、新たな創造的普遍的地平を未來に向つて開くことを意圖するような研究態度、あるいは方法のことである。一般に宗教の本質が問題とされるとき、特殊研究はその探究の目を歴史に現われた既往の形相にそそぐが、このようにして得られた本質の解明には、必然的にその理解を特殊性の中に閉鎖してしまふという限界が隨伴して來る。しかし宗教的生そのものは本來創造的で無礙なものである筈だから、それぞれの宗教を自己の内面から開かれた普遍性の中に高めることの方が、自らを特殊性の限界に閉ざすより、根本的な本質把握の方向である。

第二にこのことは宗教哲學の立場に重大な轉換をもたらすであろう。というのは、宗教哲學の任務は、もはや單なる宗教體驗の意味の哲學的反省・了解に止まるものでなく、宗教的生（體驗）の創造的な發展に積極的に關與するものとなるからで、そこでは哲學的思惟は、從來のいかなる哲學的立場よりも、より内面的に宗教的生にひとりうるであろうし、宗教的生もまた、いかなる理性の自由をも自らの中に包みうるような根源的主體性に立ちもどるのであろう。現代の宗教哲學は、辯證法神學も實存哲學も、いずれも近代の理性の立場を主體的對決によつて超克しようとするが、それらの對決の態度そのものは、明らかに同時にその哲學の宗教的性格―無神論的なものを含めて―を決定している。西谷教授の場合は、この兩者とも異なる、いわば兩者を綜合しようする第三の次元を切り開

く立場がそこに現われ、それによつて新しい視角から、哲學と宗教、理性と信仰の問題の解決が意圖される。要するに宗教哲學は西谷教授においては哲學全體の核心の問題であり、現代の精神的況位の唯中から、未來に向つて企投される實存的な歴史哲學の性格を有するものである。このような氣宇の大きな宗教哲學の形成には、深い内面性を湛えた強靱な思索力と、繊細な理解力をもつてする哲學史・宗教史、さらには精神史全體に對する廣い造詣が要求されるが、西田哲學と波多野哲學の長所をもとに生かしている教授は、そのような條件を満たしうる十分な資格を有するといえよう。

昭和二年『シェリング自由意志論』を出して、ドイツ觀念論の研究から始めた西谷教授は、體系への意圖を有する著作『根源的主體性の哲學』（昭一五）の中に收められた初期の論文に見られるような、カント、ヘーゲルなどに對する独自の深い見解を携えて、さらにヘーゲル以後の諸哲學に及び、ケルケゴールやニーチェ（『ニヒリズム』昭二四）、ベルグソンやハイデッガーの哲學に對しても緻密な研究を行なつてゐる。しかし他面『神祕思想史』（昭七）、『アリストテレス論攷』（昭三三）、『神と絶對無』（昭三三）および『根源的主體性の哲學』にその造詣の一端を示すような、プラトン、アリストテレス、プロティノス、アウグスチヌス、エックハルト、ベーメなど古代から近世にわたる廣範な研究領域をも兼ね有している。これら諸業績においては、周到な準備と、原典に即して行なう着實な研究方法に思想史研究における波多野教授の學風が偲ばれるし、また他面たちまちに問題の核心に内面から立ち入り、事態そのものを主體的に推進する鋭利な論理と、つねに問題を新しい光のもとに投じて、廣い眺望の中に收める鮮やかな手法は、正しく西田教授に受けたものである。

第三に、上述のような綜合的普遍的研究の具體的實例は教授の神祕主義の研究である。『神と絶對無』では、このような研究態度が、西洋思潮と東洋思潮、ことにキリスト教と佛教との相觸れるわれわれの精神的況位の意義の自覺に根ざしていることが示される。そしてエックハルトと大乘佛教（ことに禪思想）との内面的親近性乃至一致

が、これら二つの世界宗教を、より高次の普遍性へ高める重要な契機としてとり上げられ、その本質構造が解明される。すなわちエックハルトが、靈は突破において人格的な神（三位一體の神）をも超えて神性の沙漠に至る、というのは、まさしく大乘佛教の絶対無・絶対空の體驗と相應するもので、空はここでは空をも空する絶対否定性として主體となつて生きて働いている。否定的という面から考えると、かかる空は、今日の實存哲學が虚無の深淵にさしかけられたものとしての自己の脱自性を自覺する場合に、實存が面するところの無や虚無よりも一層その否定において内面的徹底的である。しかも絶対無の否定性は、この窮極の内面化主體化を通つて、翻つてそこで實存がふたたび起死回生する絶対肯定に轉化する。エックハルトの神性の沙漠は、神が眞に神となり、人間がまた人間として眞に自主獨立となつて働きうるところである。佛教では眞佛・眞人の所在である。それはもちろん神祕的冥合や恍惚により、靈が超越の世界に埒し去られることでなく、かえつて反對に現實の世俗の世界の唯中において、神と人間とが能作的合一において働くことであり、すなわち色即是空・空即是色なる平常底である。

西谷教授は、こうして大乘佛教が眞空妙有の立場として示して來たものを、今日の哲學の中心課題と結び合わせる。何となれば近代科學の發展の結果として、今や人間存在の最奥部にまで滲透し、人間や世界をその奔流の下に沈めるのは勿論、最後には神の座にさえ位するに至つたニヒリズムを超克しうる唯一の道が、ここにだけ存するからである。上述のように眞空妙有の立場では、從來の形而上學や信仰が、時の彼方、現象の彼岸に超絶すると考えた永遠の實體・神は、超越をふたたび超越することにより、絶対の此岸「此所・今」に現成する。このような體驗の立場―生の最奥における端的な宗教的事實の覺悟―に立つて、理性および信仰の立場を批判し、ここでは、それらの執する取像性のゆえに、人間の自覺においても、神の概念においても、一應自明のように考えられる人格の概念の最後の根據がなお閉鎖されたままであり、依然暗黒に放置されていることを明らかに、從來の宗教哲學の根本問題をかかる見地から考え直して行くことを意圖するもの、それが教授の宗教哲學の眼目である。教授の學位論文

『宗教哲學—序論』(昭一六)では、信仰・認識の立場を超える體驗の立場の意義を強調し、従来の體驗を主觀的とする考え方の迷妄を排し、體驗の立場の眞の脱自性を明らかにし、かかる生の頂きにおいて前二者の矛盾を止揚しようとする。そしてその立場から「哲學と宗教」・「惡の問題」に深い洞察を與える。この論文にその骨子が示されるような、教授の宗教哲學の體系の全貌は、最近になりようやく繊細深遠であるとともに極めて鮮明な一連の論文となつて現われて來ている。

西谷教授はその講義においても、大體以上のような構想に基いて、獨自の研究領域を開拓して行つた。すなわち特殊講義では「宗教に於ける非合理性と合理性」(昭一五)、「理性の立場と實存の立場」(昭一六)、「神祕主義の研究」(昭一七前)、「神祕思想史」(昭一七後)、「獨逸神祕主義」(昭一八)、「宗教と文化」(昭二〇)などの題目がとり上げられ、演習にはシュライエルマッヘルの宗教論、カントの宗教哲學、ヘーゲルの宗教哲學講義などが用いられた。なお昭和十二年から二十二年までの間、特殊講義として、片山正直講師(昭二一—二五)が「聖なるもの」、「宗教的愛の研究」などについて論じ、後には長澤信壽講師(昭一六)、宇野圓空講師(昭一七)もそれぞれ講じた。また卒業論文の題目には神學・宗教哲學・佛教哲學の廣い範圍から、特殊な問題が選ばれている。「宗教學茶話會」は大學院學生・卒業生・學生の研究を中心に随時開かれ、活潑な論議がなされた。

しかるに昭和二十二年七月西谷教授は「學部の歴史」に述べたような事情で退官し、佛教學講座の久松眞一教授が本講座を分擔することとなつた。久松教授は「佛教的世界」(昭二三)、「佛教的宗教哲學」(昭二三)と題する宗教學の普通講義を、片山講師は「聖なるもの」について研究講義をそれぞれ行ない、また二十二年からは武内義範講師が演習を行なつてヘーゲルの「宗教哲學講義」を用いた。武内講師は二十三年八月助教教授に任ぜられ、「宗教的實存に於ける内在と超越」(昭二三・二四)、「東西神祕主義の比較研究」(昭二六)などを講題として、信仰と神祕主義、信と證との關連の本質を佛教およびキリスト教にわたつて究めようと志している。演習には引き続きヘーゲルの

『宗教思想』が用いられた。この時期以後、教養部の武藤一雄助教がケルケゴールの諸著述や、オットーの「聖なるもの」を演習および研究で用い、また棚瀬襄爾講師は他界觀念の研究、宗教民族學、マリノフスキー研究、宗教における人格的態度など、宗教民族學に關する諸研究を現在まで引き續き講じている。その他、二十三年度には古野清人講師が宗教社會學の講義を行なつた。その後、久松教授は二十四年六月停年退官し、代つて二十七年二月西谷教授がふたたび任官し、本講座を擔當するに至り、ようやく舊に復することができた。

久松教授の宗教哲學における立場は、重點が佛敎學・佛敎哲學にある點で相違はあるが、やはり普遍的綜合的立場に屬している。それは、教授の著『東洋的無』（昭一四）に明瞭に現われている。なお久松・西谷兩教授に共通な點は、兩者ともに禪の體驗に基き、西田哲學の無の場所の思想を、それぞれの仕方で展開していることである。久松教授は、早くから新カント派の價值哲學の立場からする人間内在的な宗教哲學にあき足らず、宗教の獨自の作用と、その個有のアプリオリとを理性の限界の埒外に求めようとした。従つてオットーが聖の概念をヌミノーゼに基け、宗教體驗を第一義的には非合理的なものとし、その因由を絕對他者に歸せしめた點は、教授の賛同する所であつた。しかしオットーの立場はなお心理主義的で、その點彼の絕對他者は内在主義の殘滓を止めている。これに對し辯證法神學はかかる内在主義・主觀主義をも否定し、神はここでは眞の客體的な絕對他者として現われている。従つて後者における聖の理解は、前者よりも一層具體的かつ徹底的であると教授は考へる。辯證法神學では神と人間との關係は絶體の懸絶であるが、同時にまた逆説的結合が神の側から成立させられる。この神學におけるように、かかる信仰による聖の體驗は、一般に逆説的な神・絕對者との交わりに成立する。しかしかかる信の立場は、さらに徹底超克さるべきで、客體的な絕對他者は自己自身とならねばならぬ。かかる絕對自者としての聖の體驗は、むしろ「廓然無聖」たるものでなければならぬ。聖が聖として特殊のアプリオリとされるのは、聖俗差別の立場からである。しかし絕對者は外對立を絶し、内差別を超えたものでなければならず、故に聖は無聖にまで深まらねば

ならない。

久松教授はこの禪意識を、たとえばプロティノスの「一者」の神秘的體驗に觸入させる。プロティノスにおける一者の純一無雜と、一者よりの萬物の流出は禪體驗に即し、もつともよく理解できる。西歐神秘主義の中には、このような禪的なものがあるが、しばしば現われているが、それが西歐思潮の中で今日まで全體の主流とならなかったのは、西歐思想は「現實に有るもの」の立場を離れなかつたからである。現實にあるもの、あるいは世界において有るものは、一般に個と個との相互限定、限定と被限定との交錯、有と無との相即相入により成立している。故にここでは、有るものはつねに絶對の矛盾に逢着している。この絶對危機に面し、現實に有るものの立場は、自己自身を超えて世界の彼岸に立つ超越者の方に向う。しかしかかる超越も、實はつねに現に有るものの立場を離れない。そこに西歐形而上學とクリスト教の神信仰とが、客體として超越的―對象的に絶對者を表象する所以がある。これに對し「東洋的に形而上的なるもの」、すなわち「東洋的無」の立場では、上述の有の論理の逆轉である無の論理が成立する。東洋的無においては現に有るものの立場が根柢から離脱否定される。そのことにより、有の立場で超越と考えられるものがかえつて現存となる。だからここでは超越は、もはやいわゆる超越としての表象的意義を失なう。東洋的に形而上的なるものは世界の彼方ではなく、逆に世界の深奥―永遠の現在としての此所・今に現在する。それはもちろん有の現存がそのまま肯定されるということではない。直接的な有の現存は、否定という面からいえば、有の立場、人間内在主義の立場の全き否定を通つて、從來のいかなる立場よりも徹底的に空無に歸せしめられている。しかもかかる否定を通じて絶後に蘇えつた新たな肯定が有の現存に與えられるのである。

つぎに當時の本講座専攻學生の動向を一瞥すると、昭和二十年以降數年の間には、一面では、終戦によつて復學した學生の増加と、他面ではまた當時の不安な社會情勢に影響されて、宗教問題が若い人びとの心を捉えたためであらうか、本講座は例外的に多くの學生を容したこともあつた。當時の學生の卒業論文には、從來のように、カン

ト、シュライエルマッヘル、ヘーゲル、キェルケゴール、ベルグソンなど宗教哲學に關するもの、あるいはパウロ、カルヴィンなどの神學に關するもの、親鸞や臨濟の思想についての佛教哲學的研究などが多く課題とされたが、一般に實存的な傾向が強く、かつ内面の要求と、それを學問的に取り扱うための學力との間に、落差を生ずる場合がしばしばあつた。しかし當時の學生のうちから、その後比較的多數の若い着實な研究者が生じて來てゐることは注目すべきである。

再任以後、西谷教授は「近代世界に於ける宗教」(昭二七)、「近代精神と宗教」(昭二八・二九)、「宗教に於ける理性と實存」(昭三〇・三一)などを研究題目として、近代世界における人間のあり方をとり上げ、近代に於ける科學・哲學・宗教の關連を究明する一連の講義をつづけ、演習にはハイデッガーの「形而上學とは何か」、「根據の本質」、「眞理の本質」、「ヒューマニズムに就いて」などを用いてゐる。武内助教教授は研究には「愛と離脱」(昭三〇・三一)と題して絶對知と宗教的愛との本質關係を論じ、演習には二十七年以降ヘーゲルの「精神現象學」を使用している。武藤助教教授は「神學と宗教哲學」(昭二九・三〇)と題して、兩者の關連およびその相違を明らかにする講義を行ない、棚瀬講師は「宗教の文化性と社會性」(昭二九)、「原始宗教の諸問題」(昭三一)などと題して、文化人類學および宗教民族學の立場から宗教を考察し、宗教文化および社會との關係を明らかにする研究を行なつてゐる。

宗教學第二講座 (基督教學)

本講座が宗教學第二講座として開設されたのは大正十一年五月であるが、その前史ともいふべきものは、明治四十年五月の宗教學第一講座の創設に遡る。すなわち米人シドニー・ギューリック講師はその年から「基督敎教理史」を講じたが、大正三年以後は日野眞澄講師がそれに代り、「基督敎教理史」、「基督敎教會史」などの講義を行ない、

大正十四年に及んでいる。その間大正八年と十年の二回にわたり、基督教の學術的研究のため渡邊莊學資金が寄附され、ここに基督教講座の設置が具體化することとなつた。

講座開設とともに大正九年以來「原始基督教」に關する講義を行なつて來た波多野精一教授は、この講座を兼擔することとなり、大正十一年から十五年にかけては、「パウロ及びヨハネの宗教思想」を講じた。また大正十三年には山谷省吾が講師に委嘱され、以後主として新約學に關する講義を、昭和二十一年五月退職するまで續け、「パウロの神學」(昭五)、「イエスとパウロ」(昭六)、「原始基督教」(昭一三—一五・一九)、「新約聖書文學概論」(昭一七・一八)などの題目が掲げられた。山谷講師はまた新約聖書の註釋書をつぎつぎと公にし、昭和十一年には「パウロの神學」が著わされ、この研究によつて翌年文學博士の學位を授與された。

波多野教授は、昭和二年十二月本講座の兼擔を解かれて分擔となつたが、その後昭和十二年三月には宗教學第一講座から本講座に轉じて、その擔任者となり、はじめて本講座は専任教授をもつこととなつた。しかし波多野教授は同年七月停年のため退官したので、ふたたび擔任者を缺くこととなり、この状態は昭和二十三年まで續いた。しかしながら昭和十二年には松村克己が講師となり、波多野教授退官後は山谷・松村兩講師が本講座を護ることとなつた。松村講師はじめもつばら講讀を指導したが、昭和十六年からは「基督教における信仰と論理」(昭一六)、「イエスにおける神の國」(昭一七前)、「基督教倫理學の基礎概念」(昭一七後)、「基督教神觀の問題」(昭一八)、「イスラエル・ユダヤの宗教」(昭二〇)などの特殊講義を行ない、十七年には助教教授に任ぜられた。

戦後になつて、昭和二十一年五月山谷講師は退職し、また同年十二月には松村助教教授が占領政策に基く休職を命ぜられ、やがて退職するに至つた。宗教學第一講座擔任の西谷教授また同じように退官し、宗教學は一大打撃を蒙り、その影響は甚大であつたが、しかしようやく昭和二十三年十月になつて同志社大學神學部有賀鐵太郎教授を本學教授に迎え、講座の再建に當らせることとなつた。

有賀教授は、すでに昭和二十一年十月以來講師として協力していたが、本講座を擔任して以來、講義としては、「三一神論成立史」(昭二四)、「基督教學序論」(昭二五—二七・二九)、「基督教思想史概説」(昭二八)、「教會史序論」(昭三〇)、「原始基督教」(昭三一)などの題目を掲げ、研究としては、「教父學序論」(昭二四)、「初期基督教におけるグノーシスの問題」(昭二五・二六)、「ヘレニズム時代におけるヘブライ思想」(昭二七)、「初代教父思想」(昭三〇・三二)などを講じて來ている。演習においては新約原典をはじめ、「Wikgren, Hellenistic Greek Texts」(昭二七・二八)、「Harnack, Lehrbuch der Dogmengeschichte」(昭二九)、「Tillich, Systematic Theology」(昭二八・二九)、「Origen, De Principiis」(昭三〇・三一)、「Althaus, Die christliche Wahrheit」(昭三〇・三一)などが用いられた。

講師計畫についていえば、昭和二十四・五年度には山崎亨講師が「舊約聖書研究」を講じ、二十六年以後は英人グイリム・ロイドを講師として「ヨハネ文書の神學思想」(昭二六)、「舊約原典初歩」(昭二七)、「舊約原典講讀」(昭二八・二九)、「ヘブル書研究」(昭三〇)の講義または講讀がなされて來た。また二十八、九年度には片山正直講師による「バルト神學研究」なる講義が行われ、三十年度から本年度にかけては、松村克己講師が「現代神學の諸問題」を講じ、また本年度は淺野順一講師の「予言者神學における智慧概念」、および神崎大六郎講師の「Paul Althaus, Die Christliche Wahrheit」の講讀が行われている。また昭和二十五年には、本講座専攻最初の卒業生を出すこととなつたが、これは本講座開設から實に二十八年後のことであつた。

有賀教授は、教父學を中心とした基督教思想史をおもな研究課題とし、『オリゲネス研究』(昭一八)においては教父思想の研究における立場の確定を求めている。この書は學位請求論文として教授會に提出され、昭和二十一年文學博士の學位が授與された。また本學來任以後は、主としてヘブライ宗教、および原始基督教思想における「智慧」の問題についての思想的發展をたどりつつ、ヘブライズムとヘレニズムとの歴史的交渉を、この角度から究明

しようとしており、最近の論文「ヘブライ思想における神と智慧」、「コーヘレスにおける智慧」、「カントのヨブ論」などにおいて、その研究の一部が発表されている。

有賀教授はまた「宗教研究会」を起して、その會員とともに「世界文化創造と宗教」なる題目のもとに総合研究計畫をたて、昭和二十四年から二十六年にわたる三年間文部省科學研究費の交附を受けたが、その研究分擔者は京都大學のみでなく、同志社大學・龍谷大學からも参加し、計十三名に上つた。また昭和二十七年十月には「日本基督教學會」が発足したが、これはもと有賀教授の發議により、石原謙、岸本英夫、大島清、菅圓吉、大泉孝、桑田秀延、魚木忠一ら各方面の基督教研究者の賛同を得て成立したもので、基督教學の超教派的・純學術的綜合學會として、わが國最初のものである。なお教授は「日本宗教學會」にも理事として協力しているが、昭和二十五年秋には福音同胞教會の招待によつて、短期間の米國出張をなし、戦後の米國基督教會、および基督教學研究機關との連絡をはかつた。さらに二十八年には、米國ニューヨーク市のユニオン神學校の招請に基いて、海外出張を命ぜられ同年秋から翌二十九年夏に至る學年の専門講義を擔當し、九月歸國した。

宗教學第三講座（佛教學）

本講座の創設は大正十五年六月であるが、事實上の佛教學の講義は、本學部開設の當初から、哲學哲學史第二講座（印度哲學史）において行われていた。すなわち松本文三郎教授は、印度哲學史の一環として、廣く佛典・佛敎史・佛敎教理・佛敎藝術の萬般を扱うとともに、別に古くは熱田鑿知講師、齒田宗惠講師（宗敎學講座）がこれを手助け、やや降つては齋藤唯信講師、羽溪了諦講師などが、おのおのその専門に従つて佛敎の學術的開明を行なつた。印度哲學史講座に屬する學生もまた、その大半が佛敎學を履修して卒業論文の題目とした。これらのことは、

本學部が、最初から佛教を含めた東洋文化の研究にその特色を置こうとしたことと相應じ、當然のことであつたといえよう。

かくて大正十五年、本講座が宗教學第三講座として印度哲學史講座から分離するに及び、昭和二年度から佛教學專攻の學生が收容されることとなり、羽溪了諦講師が本講座の分擔を命ぜられた。以後これに對し、印度哲學史講座は主として佛教以外の印度思想一般を擔當するようになったが、しかしまた學問の性格上相連關することが多いので、その後、兩講座は緊密な關係を維持し、たがいに相助長してその研究分野を擴大し、今日に至つてゐる。

羽溪講師は昭和四年助教となつて本講座を擔任し、九年には文學博士の學位を授けられ、翌年三月教授に昇任した。なお十二年から十五年までは宗教學第一講座の分擔をも兼ね、十八年九月停年退官した。

羽溪教授は、松本教授のもとに印度哲學史を專攻した本學部第一回の卒業生で、早く『西域の佛教』(大三)を世に問うてから、のちこれを改訂した學位請求論文「西域佛教の特徴」が提出されるまで、その間教授の西域佛教に關する論文は少なくない。當時は中央アジアに對する各國



羽 溪 教 授

の探檢調査が行われ、その結果も續續發表され、ようやく中亞佛教の意義と重要性が認識されようとしていた時で、教授はいち早くその研究に着手したのである。しかし教授の學殖はもちろんこれに止まることなく、ペリ語を中心とし、別に梵語・漢譯の諸文獻を驅使して原始佛教を探り、あるいは後世の印度および中國大乘佛教を論じ、さらに日本の佛教にも深い造詣を示すなど、その學はほとんど二千五百年の全佛教史を被うものであつた。學生は各自思い思いに、印度から日本に及ぶ廣い分野の特殊問題を研究主題としたが、教授はよくそれらのいずれにも適切な指導と誘掖を與えた。

教授は普通講義では、佛教の基本原則としての「法」dharma の觀念をとり上げ、これをあらゆる角度に應用し、またあらゆる角度からこれを考察しようとした。すなわちその佛教概論は、(一)教説としての法、(二)緣起的規範としての法、(三)實相的規範としての法、(四)理想的規範としての法、(五)修道的規範としての法の五篇からなる大きな組織をもち、その着眼と内容は從來の概論に比し、明らかに著しく新味に富んでいた。その一部は『佛教學概論序説』(昭一〇)として出版されたが、また『佛教教育學』(昭一一)などによつてもその片鱗を窺い得る。また特殊講義としては、「佛教の起源」(昭九)、「西域佛教の研究」(昭三)、「印度佛教史」(昭一〇)、「佛教の實踐的規範」(昭一三・一四)、「中觀教學より唯識教學への展開」(昭一六)、「日本佛教の特異性」(昭一五)などの講題が掲げられ、とくに「印度大乘佛教思想の發達」(昭六一九)、「實相論の展開」(昭一一・一二)、あるいは「支那佛教史」(昭一四)など、いずれも二年乃至四年にわたり詳細緻密な論評が展開された。太平洋戰爭勃發後の昭和十七年からは「南方佛教の研究」に着手、さらに停年退官の年には「佛教の悟界」を併せ講じ、戦時中の學生に多大の感銘を與えた。一方演習ではこれら特殊講義の内容と關連させて、パリー語のウダーナおよび長部を始め、佛國記・弘明集・俱舍論・金剛般若經・中論・十二門論・唯識二十論・唯識三十頌・攝大乘論・成唯識論・解深密經・佛性論などの諸經論が討究され、また別に講讀としてレーマン、キース、グールケ、バルア、ダスグプタ、オルデンベルグなどの近代の學者の著述も採用された。

講座設立の當初、昭和二・三年度には印度哲學史專攻の學生と共通の講義が副科目としてあり、齋藤唯信講師が「大乘起信論」、「十不二門」などを講じ、手島文倉講師は因明學の諸書、および「佛典の成立および發達」を講じた。ついで同四年から十年に至る間には國史學講座と協同で、日本佛教各宗史の講義が企てられ、田村德海講師は「日本天台宗史」、河野法雲講師は「日本華嚴宗史」を、林彦明講師は「日本淨土宗史」、梶尾祥雲講師は「日本眞言宗史」、上杉文秀講師は「眞宗史」、花田凌雲講師は「唯識論を中心とする支那及日本の佛教史」、望月歡厚講師

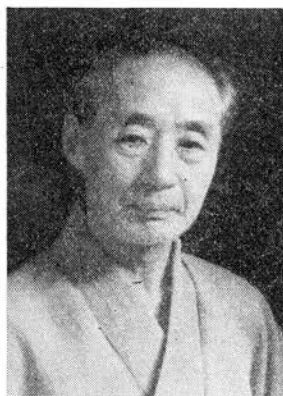
は「日蓮宗史」とそれぞれ専門學者によつて毎年順次講述された。なお、このほか昭和五年九月にはベルリン大學グラーゼナップ教授の、印度哲學と佛教との交渉に關する一回講義が催され、十年十月には法隆寺佐伯定胤管長が、唯識教學における文義聚集の過程について三回の特別講義を行なつた。また十一年十二月から翌年一月にはローマ大學のトゥッチ教授が來朝、本學でも講演を行なつたことがある。

まさに哲學講座に屬していた久松眞一講師は、昭和十年本講座に轉じ、以後長く羽溪教授を援けるに至り、本講座の陣容は著しく強化された。すなわち久松講師は十二年三月助教授に任せられ、羽溪教授退官の後十八年九月から本講座を擔任、二十一年三月にはさらに教授に昇任、二十二年十月には文學博士の學位を授けられた。久松教授は二十四年六月停年退官したが、この間二十二年三月からは宗教學第一講座をも分擔していた。

久松教授はもと本學部における西田幾多郎教授の初期の門下生として哲學を専攻、その後長くヨーロッパの宗教哲學を攻究し、これを龍谷大學その他の教壇で講じていたが、禪の實踐者としてもすこぶる令名が高かつた。このような哲學と禪思想の體驗をもつて、教授は本講座に新たな氣風を注入、この氣風を仰いでいるはる入學を志して來る學生も稀でなかつた。教授は昭和十年以降、「即無的實存」(昭一〇)、「起信論に於ける哲學的課題」(昭一一・一二)、「日本文化に於ける禪的契機」(昭一三・一四)、「世界の佛教的構造」(昭一五)、「法界緣起論」(昭一六・一七前)、「絶對行」(昭一七後)などの特殊講義を行なつたが、その一部はやがて『東洋的無』(昭一四)を始め、のちの『起信の課題』(昭二二)、『絶對主體道』(昭二三)などとして世に現われた。また羽溪教授退官後の講義(普通講義)には「佛教哲學」(昭一九・二〇)、「佛教の體系」(昭二一)、「佛教的世界」(昭二二)、「佛教的宗教哲學」(昭二三)、「覺の宗教」(昭二四)などと毎年特殊な題目を取り扱い、研究(特殊講義)としては、「根本智」(昭一八)、「絶對道」(昭一九)、「絶對大乘」(昭二〇)、「生産の宗教」(昭二一)、「絶對現實」(昭二二)、「還相の論理」(昭二三)、「無神論」(昭二四)などがあり、演習としては“W. Bohn, Die Psychologie und Ethik des Buddhismus”を始め、

傳心法要・正法眼藏・華嚴金獅子章・維摩經・教行信證・肇論などが用いられた。

久松教授の立場は一言にしていえば、教學的にはむしろ起信論乃至華嚴哲學に親しいものであった。そこには絶對的な生佛一如が強調され、それが絶對無とも絶體主體とも稱された。しかしなおこのみでは教授の本領を發揮する所ではなかつたであろう。そのような立場が理解されるためには、教授独自の禪的體驗が必要であつた。禪的體驗とはすなわち絶對道であり、絶對行である。そして無的主體は、またかかる行を通じて新たに現實の世界に働き、現實の世界を生産するものでなくてはならない。教授はまた時にその透徹した論理を以て鋭い批判を淨土眞



久松教授

宗の信仰などへも向けた。これら禪と念佛というような佛教内でもつとも具體的な問題をとりに上げることにより、また身をもつて戦時中から戦後へかけての苛烈な時代に生きる學生を指導した。教授が學業の餘暇に昭和十九年頃創設した「學道道場」は、當時まで存在した佛教青年會のあとを受け、全學的組織の下に多くの學生および卒業生を吸引し、教授は親しかれらと時に起居を共にしながら切磋琢磨を行なつたが、これは教授の佛教學的實踐行を示す一例である。また學生間に「心茶會」が昭和十四年ごろ組織され、茶道を通じて學生生活を指導したことなども、同様な例であろう。

さきに述べた日本佛教各宗史の講義が一應終了した翌昭和十一年からは、无氏祐祥講師の「日本佛教史」(昭一一)長尾雅人講師の「唯識論の註釋的研究」(昭一三)、および「唯識三性說の研究」(昭一四)、塚本善隆講師の「六朝以後の支那佛教」(昭一五)および「北支那佛教の發展」(昭一六)、釘宮武雄講師の「日本天台の得失と鎌倉佛教」(昭一七前)、および「鎌倉佛教の特質」(昭一七後)などの特殊講義が、各講師ほぼ二年ずつほど行われた。また、昭和十八年十月以降は、從來印度哲學史講座にあつた山口益講師が、本講座において特殊講義を行なうこととなり、

「寂護の中觀說」(昭一八)、「龍樹教學說の研究」(昭一九)、「維摩經の研究」(昭二〇)、「印度佛教中心思想史」(昭二二)などをもつて久松教授を助け、また時には西藏語初歩と講讀を通じ學生の基礎的な知識の涵養につとめた。また別に長尾講師はつづいて、「ラマ教史」(昭一八)、「中觀哲學の立場」(昭二二)、「教判論」(昭二三)などを講じ、あるいは西藏語をも擔當、さらに藤吉慈海講師また「實相論」(昭二三)の題で、天台の教義を講じた。これら戦時中より戦後の混亂期にかけては、十九年秋を最後に二十三年春まで本講座専攻の卒業生を缺き、一般に必修科目についてもしばしば改變があつたが、その間にあつて梵語初歩を本講座學生の必須科目とすることが決定された。

久松教授退官後は、當時本學人文科學研究所にあつた長尾雅人助教が、昭和二十五年二月本學部勤務に轉じ、本講座を擔當することとなつた。長尾助教は二十五年七月學位を授與され、さらに翌年三月教授に昇任、現在に至つている。長尾教授は本講座第三期生として羽溪教授門下の出であるが、のち梵語および西藏語を修得し、また山口講師の強い感化を受けその方法論を學んだ。教授が講義として行なつている「佛教學序說」は、専攻學生の手引として佛教學の基本的テキストを解説し、印度・西藏・中國・日本の佛敎史を概觀、さらにこの佛敎史を貫くものとして緣起の觀念をとり上げ、これがどのように發展したかを考究しようとするものである。しかし教授はとくに印度・西藏にわたる大乘佛敎の闡明を志すもので、西藏譯を中心とした攝大乘論、およびその世親釋の研究は十四年以來五年間に及んだ。その後は轉じて中國佛敎の最高峰である華嚴哲學をとり上げ、その五教章を印度佛敎哲學の立場から批判的に吟味し、また演習には唯識二十論調伏天釋や、前記の攝大乘論、あるいは維摩經・天台四教儀が用いられたほか、とくに二十六、七年度は龍樹の梵文寶鬘論、二十八年度は同じく廻諍論、二十九年度からは梵文究竟一乘寶性論が講ぜられている。これら後者の三梵文は、いずれも最近ネパール、あるいは西藏で發見され、整理出版された學界の新資料で、少なくともわが國大學において講ぜられたのは、これが最初であろう。また教授は中觀および唯識佛敎研究の途次、ついに西藏佛敎、すなわちラマ敎の研究にまで立ち入りその成果は『蒙古

學問寺』(昭二二)、および『西藏佛教研究』(昭二九)の二著として公刊されている。

長尾教授を助けて、その後も山口講師は研究を講じ、二十五年度の「大乘成業論の研究」はやがて『世親の成業論』(昭二六)として世に送られたが、さらに翌年からは主として大学院學生のために、西藏譯にのみ存する月稱「四百論釋」を講じたが、山口講師の中觀哲學に對する蘊蓄は、ついにこの難解龍大な論著の譯讀を可能にした。また人文科學研究所の塚本善隆教授もつづけて授業を擔當し、二十五年以降「漢譯佛教圈に於ける諸問題」(昭二五・二六)、「淨土教の發達」(昭二七)、「中國諸宗成立期の研究」(昭二八)、「中國佛教における禮拜對象」(昭二九)、「唐宋時代の佛教」(昭三〇)、「唐宋の佛教と日本佛教」(昭三一)を講じ、もつぱら中國佛教のあり方について學生を誘掖しているが、その中國佛教研究は『支那佛教史研究 北魏篇』(昭一七)、および『日支佛教交涉史研究』(昭一九)などの論著にみられるように、佛教内の資料、佛教外の正史類のみならず、金石文・造像銘乃至は隨筆その他の諸文獻など、あらゆる方面に資料を求め、他宗教や俗信との關係、歴史的社會的慣習との交渉などの觀點から考究を行なっている。

その他、舟橋一哉講師は二十六年「原始佛教思想論」を講じ、翌年度の「業の研究」は二十九年に上梓された。また二十八、九年度には安藤俊雄講師が「十不二門指要鈔」、「天台教學概説」を講じ、三十年度は服部正明講師が「月稱中論釋第一章の研究」を演習として行なつたが、中途印度に留學したので、中野義照講師が「律藏の研究」を講じた。本年は梶山雄・助手と人文科學研究所の藤吉慈海助手がそれぞれ研究を擔當している。

講義題目をたどつた本講座の歴史は大略以上のものであるが、この間舊制新制を合し、現在まで八八名の専攻卒業生を出したが、教官の研究、學生の教育は右に盡きるものでなく、別に諸種の學會が結成され、また學外との種々な提携や共同研究も行われた。まず部内では、本講座創設後間もない昭和四年六月から「印度・佛教學會」が生まれ、のち昭和十年からは、印度哲學史・佛教學・梵語梵文學の三講座共同の研究發表機關として、各教授が指導に

當り、現在は足利教授が會長となり、松尾、長尾兩教授がこれを助けている。また昭和二十年ごろから、久松教授指導のもとに本講座關係の學生が組織する「佛教研究会」が生れ、卒業論文その他が發表討議された。また別に久松教授および有賀教授などにより「宗教研究会」が組織され、長尾教授らもその共同研究に参加している。

學外にあつては、早く昭和二年全國各大學からなる「日本佛教學協會」が結成され、研究年報が發刊されて來たが、羽溪教授は當初から理事としてその發展に盡力した。戰時中開會不能となり、戰後は「日本佛教學會」と改稱して二十二年再發足し、長尾教授は二十四年以後理事に任じている。別に二十六年秋「日本印度學佛教學會」が創設され、翌年から研究大會と機關誌發刊が行われているが、これには長尾教授が理事および評議員として、當初からその創設のことに参畫し、教室員もまた多くその研究を發表している。なお古い歴史をもつ「日本宗教學會」にも本講座關係者の多くがその會員として参加している。

また、學内の人文科學研究所と本講座は特殊な親密關係におかれ、前述のように塚本教授が毎年來講するとともに、長尾教授は同研究所の諸種の共同研究に毎年参加し、またそれらには大學院學生の参加が許容され、共同研究の成果の一部は塚本善隆編『肇論研究』（昭三〇）として纏められた。また山口講師が長く本講座に關係したため、大谷大學との研究交流にもかなり密接なものがあつて、彼此教官學生らが毎週相會して、俱舍論・中論などを數年にわたり研究講讀したこともある。

なお西藏佛教研究資料の充實について一言すれば、本學は從來甘珠爾を藏するも丹珠爾を缺いていたが、幸いに高野山大學當局の好意により、その所藏するデリゲ版丹珠爾のマイクロ撮影が許容され、三・四年前からそのフィルムを整備保管をなしつつあり、まだ全量の一部であるが、すでに研究上多大の利便を得ている。また野上素一教授を介し、現在イタリア中亞極東研究所にあるトゥッチ教授との間に學的交流のことが議され、ついにその大著“Tibetan Painted Scrolls”の寄贈を受けたのは大きな喜びであつた。

なお海外への留學乃至學術調査は、中國および極東地域を除き、戦前から長く途絶え、ことに印度への留學は從來ほとんど行われなかつたが、戦後ようやくその機を得、本講座關係からもすでに三名の渡印をみている。すなわち藤吉助手は、二十六年九月招かれて印度ベナレス大學に印度哲學を學び、梶山助手も二十八年五月ナランダのパール研究所の講師として招かれ、パール語を學ぶとともに、日本佛教思想について講じ、服部講師も三十年八月からカルカッタ大學において佛教論理學および印度論理學を研究している。

社會學講座

本講座は明治四十年五月に設置され、同年九月米田庄太郎が講師となつて開講した。當初講座擔任は谷本富教授であつたが、米田講師は大正九年七月教授に任ぜられ、同十四年三月の退官に至るまで本講座を擔任した。

當時世界の社會學は、初期の歴史哲學的綜合社會學から脱し、特殊科學として確立される段階に進む過程にあつたが、多年歐米にあつてギッディングスおよびタルドに直接學んだ米田教授もまたこの過程を繼いで自己の社會學を構想し、教授のいわゆる「純粹なる科學としての社會學」を樹立することに努めたが、他方その體系にはなおかなり包括的な點が存した。すなわちその第一部は組織社會學と稱し、社會科學方法論を扱い、第二部は純止社會學と稱し、社會的現實態に特有な基礎的事實を究明することを課題とし、第三部は綜合社會學とよんで、純止社會學に基いて一切の特殊社會科學の結果を綜合し、もつて社會現象全體の知識を整理しつつ、また各特殊社會科學の上に反動してその研究を促進し、特殊科學との相互影響のもとに、相携えて具體的社會現象の科學的認識を大成することを目的とした。しかし右の三部の中心をなすものは、教授においては勿論純正社會學で、その對象は社會現象の基本的乃至本質的事實であつた。教授はそれを「心と心の相互作用及び相互關係」とし、それが成立し展開する

一般的形式と過程および原動力、その結果である社會意識、社會意識と個人意識との關係の分析究明に力を用いるとともに、またこの基本的事實の具體的現象形態として、未開人や現代人の心理・輿論・文化の發展などを講じた。

すなわち普通講義は一貫して純正社會學概論であり、特殊講義は「文化發展論」(明四四)、「現代社會及び現代文化の研究」(大元)、「原始人の心理及び世界觀」(大二)、「輿論の研究・疾病と社會生活」(大三)、「ブルジョア階級の心理と現代文明」(大四)、「近代資本主義の研究」(大九)、などであり、また演習として「社會生活と人格の發達・文化の發展」(大九)、「近代資本主義・近代自由主義」(大二〇)などが講ぜられた。これらと關連し、『民族心理講話』



米田教授

(大六)、『現代人心理と現代文明』(大八)、『經濟心理の研究』(大九)、『現代文化人の心理』(大二〇)、『現代文化概論』(大二三)、『現代人口問題』(大二〇)などの著書と、大正初期以來諸誌に發表された多數の論文がある。これら講義・論著に見られる學問的活動の基調をなすものは、前述の世界における特殊科學としての社會學勃興の最初の段階である心理學的傾向であり、この傾向は當時の日本社會學の趨勢を指導し代表するものであつた。

他方歐米にもまた社會學史の著作のほとんどなかつた講座開設當初から、米田教授は社會學史を講じて數年に及び、古代社會思想から始めて、當時もつとも社會學の盛んであつた獨佛の代表的社會學者、タルド、デュルケイム、ジンメルなどについては、とくに詳細に講述した。なお教授は科學としての社會學と、社會哲學乃至歴史哲學を根本的に分つたが、その兩者の重要性は等しく認め、現在のように社會的現實が哲學の根本問題として取り上げられる以前に、早く社會哲學を講じた。すなわち「輓近の歴史哲學」(大二〇)などであるが、さらに『ドイツ新理想主義の歴史哲學』(大九・一〇)、『リッケルトの歴史哲學』(大一一)、『歴史哲學の諸問題』(大二三)、『歴史哲學體系』(大一一)

三)などを著わした。世界大戦直後わが國にも社會運動が急激に擡頭したが、教授はその理論研究にも力を注ぎ、各國各派の社會思想とその運動を諸雜誌に説述した。これらを収録したものが『現代社會問題の社會學的考察』(六一〇)、『續現代社會問題の社會學的考察』(六一〇)、『輓近社會思想の研究』(六八・九)であり、この點實に教授はわが國における社會思想研究の先驅者でもあつたが、それは大杉榮、荒畑寒村、賀川豊彦らの人びとが教授の教えを受けたことによつても知られよう。

米田教授は、社會學の理論的研究とその應用乃至政策論とを峻別し、力をもつばら前者に注いだが、その研究と論議は社會現象のあらゆる領域にわたり、該博な知識と、卓越した語學力を驅使して海外最新の論著・學説を紹介批判して、學界に多大の啓發と刺戟を與えた。またわが國最初の全國的な社會學會である「日本社會學院」の創設(六一二)に當つては、東京帝國大學の建部遯吾教授と協力し、以來大正期を通じ東西相呼應して、わが國の社會學界を指導した。

米田教授在任中は各講義をほとんど自ら例年擔當し、わずかに大正十・十一年度に十時彌講師が「犯罪社會學」を講じたのみである。教授は大正十四年三月退官後も、本學法經兩學部および大谷大學などにおいて引き続き社會學を講じたが、昭和二十年逝去した。その遺著は『輓近社會論』として二十三年に出版された。なお教授の全藏書は歿後民族研究所に收藏されたが、同研究所が終戦と共に閉鎖された際、その書籍は一括して本學に寄託され、本學部書庫に存置されたが、その一部である教授の藏書も「米田文庫」として收められ、中には今日入手し難い貴重な社會學の専門書も少なくない。

米田教授指導の下に本講座を専攻卒業した者は四十五名、これら卒業生の卒業論文の傾向は、教授の學風を受けて純粹に特殊科學としての基礎理論に關するものと、具體的社會事象の社會學的研究と見られるものが相半ばしており、大正中期までは具體的研究が多く、後期には基礎理論を取り扱つたものが多い。

米田教授退官後、本講座はしばらく専任教官を缺き、大正十四年ごろフランスの社會學者アレキサンダー・コア
レを講師として迎える計畫があつたが、ついに實現せず、倫理學の藤井健治郎教授が兼擔して、特殊講義「社會的
理想主義の研究」などを講じ、西田教授が演習を擔當、また當時東大に來講中の、マックス・ウェーバー門下のエ
ミール・レーデラーのウェーバー社會學に關する連續講義を聴き、ついで戸田貞三講師に普通講義を委嘱した。西
田教授退官後は、藤井教授が演習を兼ね、戸田講師のほかに、新たに三浦新七講師を招いた。ついで昭和二年四月
米田教授に教えを受けた五十嵐信が講師となり、當時ドイツに勃興しつつあつた形式社會學の移入批判から初め、
大いに將來を期待されたが、在任わずか一年半、外遊を前に昭和三年病歿した。その業績は『ジッメル社會分化論』
(昭二)のほか、『五十嵐信遺稿集』(昭五)に收められている。昭和三年十一月には臼井二尙が講師となり、同五年
ドイツに留學、また四年度からは戸田講師に代り、今井時郎講師が普通講義を講じて六年度に及び、また五年度に
は岩崎卯一講師が「フランス及びドイツの社會學」を講じた。六年一月藤井教授逝去後は、野上俊夫教授がその後
任として本講座を兼擔し、演習を擔當して八年度に及んだ。

昭和七年臼井講師は佛・英・米を経て歸國、七月助教授に任ぜられて、普通・特殊講義を擔當、九年には演習を
も兼ね、以後本講座を擔任、ついで昭和十九年九月教授に昇任、今日に及んでいる。なおその後二十九年九月大谷
大學池田義祐助教授が本學助教授として來任、講座の充實を見るに至つた。

米田教授退官後から臼井教授の就任までの間の卒業生は二〇名、その卒業論文題目はほとんど社會學の基礎理論
に關するものであり、この時期になると當時の中心課題であつた特殊科學としての社會學、とくに形式社會學の基
礎理論、または方法論への關心が深まつて來ている。

臼井教授が本講座を擔當して以來、今日まで約二十年、終戦を境として、前半期を助教授時代、後半期を教授時
代と分つことができるが、まず當初臼井教授の關心は、共同社會と利益社會の概念を中心とする社會形態論に向い

講義にも「社會形態の類型」(昭九)などが講ぜられ、その後「共同社會考」(昭二四)などの論文となつて發表された。教授はまた社會學方法論を重視し、この領域においてはマックス・ウェーバーの理論から現象學に轉じ、ドイツ留學中はフッサールのもとにこの方面を究めたが、さらにハイデッガーによつて社會學の存在論的基礎付けを試みるに至つた。かくして教授は社會學の基礎範疇として社會的行爲・社會關係・社會集團を掲げ、從來の社會學者が多くこれら三者の一のみを取つて自説の對象領域としようとしたのに對し、これらは區別されつつ、たがいに含み合う關係にあり、一の究明はかならず他のそれを必要とするとの考えのもとに、これら三者の構造および主要形態の分析(理論的部門)と、これらの社會的現實態における主要な具體的形象の把握究明(歴史的部門)とを社會學の中心問題としてゐる。教授は早く米田教授の學風を繼承して、特殊科學としての社會學により、ウェーバーの理念型をもつてする獨自の包括的な對象領域の開拓組織化を志向する右の方法論を展開し、これに基いて理論・歴史兩部門の體系を構想していたが、この方法論および體系論に見られる見解の概要は『社會學』(昭二五)やその他の雜誌論文に發表されている。

教授は、さらに社會集團の中とくに重要なものは社會そのものであるとの見地から、社會の構造、その變化發展の過程と段階、およびその規定因素などを、右の諸範疇の觀點から究明することに主力を注いで來た。社會構造の問題では、社會の水平的および垂直的區畫としての民族と階層、さらにこれらを規制する國家などが基礎的位置を占める故に、社會そのものの究明はこれらを中心に進められた。昭和七年から十九年に至る例年の普通講義「社會學概論」は一貫して教授の方法論、および理論的並びに歴史的部門における主要問題の講述で、まず社會學の對象と方法を明らかにし、つぎに主要社會關係、または主要社會集團の中から毎年異なるもの若干を抽出講述することによつて、社會學がその對象をいかに扱うかを理解させるに努めた。また特殊講義は、おもに階級や民族に関する諸問題についての詳述で、「國民の諸問題」(昭一〇)、「權力と支配」(昭一一)、「身分と階級」(昭一二)、「近代階

級」(昭二三)、「人種問題」(昭一七)、「民族主義の變遷」(昭一八)、「民族發展の諸段階」(昭一九)などであった。

この間昭和十二年度から社會學のおもな特殊領域についての特殊講義を加え、毎年それぞれに造詣深い講師を委嘱した。すなわち來朝中のカール・レーヴィット講師による「近世社會思想史」(昭一二)、松本潤一郎講師の「社會進動論」(昭一三)、古野清人講師の「原始社會の構造とトーテムズム」(昭一四)、戸田貞三講師の「家族の集團的特質」(昭一五)、奥井復太郎講師の「都市社會學」(昭一六)、難波紋吉講師の「文化社會學の一考察」(昭一七)、牧野巽講師の「支那家族の研究」(昭一八)などがそれで、さらに十九年度には重松俊明講師が「支那社會の研究」を講じた。

戦時中は、戦争の激化とともに本講座も種々な影響を受けたが、とくにかかる時期においては、社會的現實を對象とする點から、時勢への順應を強要する壓迫を蒙り易い社會學に携わる者として、いたずらに時流に投ぜず、また壓迫に屈せずして、學問の純粹性・研究の客觀性を保持する上に、細心の注意と多様の苦心を拂わねばならなかつた。歐米學界との交渉が阻害され、ついには全く杜絶したため研究に著しい支障を來した反面、東亞ことに中國社會の研究が盛んとなつたのは不幸中の幸ともいふべきで、臼井教授も昭和十四年人文科學研究所の創設とともにその所員を兼ね、中國社會に關する研究を進めた。なお教授は、米田教授について十七年から本學法經兩學部の社會學講義を擔當し、二十九年の舊制廢止にまで及び、さらに日本社會學院の後を繼いで、大正十二年に創立された「日本社會學會」に、昭和七年以來理事として加わり、その維持發展に努力した。

この期間の卒業生は六六名、その卒業論文の一般的傾向として、方法論や社會關係および社會集團に關する純粹な基礎理論乃至學說の理論的研究に關するものから、次第に家族・村落・都市・民族などの主要な具體的形象の社會學的究明にかかわるものへ關心が移行して來たことが認められる。

戦後における臼井教授は、前述した自己の立場において、社會的現實態における主要な具體的形象の把握究明に

力を注ぐとともに、他方社會的行爲・關係・集團の基礎理論の分析解明を進めて行つた。教授がこの期間に普通・特殊講義で採り上げている具體的な主要社會形象は、民族・國家・家族・村落・未開社會・郷土と祖國・階層・都市などすこぶる廣範圍にわたり、最近はとくに日本村落の社會集團としての諸屬性を、純粹に社會學的な見地から綿密詳細に講述しているが、これらの研究の一端は、具體的社會形象に關する方面では、「人種史觀考」(昭二一)、「民族發達の諸段階」(昭二二)、「未開社會考」(昭二六)などの論考となつて現われており、一般的基礎理論の方面では「社會の集團的統一性の基礎」、「共同社會考」のほか、「社會と個人」(昭二三)、「親和關係考」(昭二九)などがある。なお戦後わが國にも社會科學興隆の氣運が萌したので、教授は高田保馬博士らとともに、社會科學の純學術雜誌『社會科學評論』を創刊し、これに相ついで論文を載せたが、純理論のみの學術誌の育つ基盤はまだわが國では成熟せず、第五輯で廢刊となつたのは遺憾であつた。

二十年度以降の講義は、白井教授の右の講義・研究、および専攻學生の研究テーマを中心に討議する演習のほか、毎年つぎの研究または演習が行われている。すなわち二十年度から二十三年度まで、重松講師が「社會と國家」、「近世社會」などを講ずるほか演習を擔當、二十三年度からは姫岡勸講師が「家族の理論」を講じ、同講師はついで本學教養部教授に轉じて後も、家族に關する研究を講じ、また演習を擔當することもあつて今日に及んでいる。さらに江藤則義講師も二十五年から研究「Community論攷」を講じたが、翌年同様教養部教授に轉じ、その後も引き続き社會調査に關する研究および時に演習を擔當している。教育學部に來任した重松俊明教授は二六、七年農村家族、近世社會についての研究を講じ、二十七年はさらに藏内藪太講師が「文化社會學の諸問題」を講述した。また二十八年以降は教育學部渡邊洋二助教が演習を擔當、二十九年は後期からは新たに池田助教が、「ジニメルの社會學」を講じ、また演習を擔當、ついで三十年度には作田啓一講師が佛語を習得した専攻學生の増加に應じて佛書講讀を行ない、また近時のわが國の重要問題となつている人口問題のために、岡崎文規講師が招かれて

「人口學一般」を講じた。また本年度は佛書誦讀を杉之原壽一講師が行ない、研究としてスチュワード講師の「文化人類學の基本問題」が講ぜられた。このように從來三一四科目であつた講義は、二十五年ごろから漸増し、本年度は十科目の多きに達している。さらに二十八年度からは大学院文學研究科が開かれ、本年度は講義を白井教授、池田助教および教養部の姫岡、江藤教授、スチュワード講師が擔當、大学院學生の研究指導に當つてゐる。

戦後におけるわが國社會學の顯著な動向は實證的調査による社會現象の實證的研究が盛んとなつたことで、これは從來形式社會學を中心としたドイツでも、戦後調査を主とする純粹に實證的經驗的な傾向が漸次勃興し、英・佛でも同様であるという世界的傾向と相應じる。ことにわが國では戦時中の社會學に對する不當な壓迫が除去されるとともに、米國學界の影響を受け、從來閉却されていた實證的研究が急に盛んとなつて來たのであり、最近では社會學講座の實験講座化が叫ばれ、本講座でもその實現が待望されている。このような世界およびわが國の動向に應じて、白井教授も早く實證的研究の重要なこと、とくにそれが社會學的觀點のもとに實施されることの必要を認め、すでに戦時中若干の村落調査を實施したが、戦後はいち早く二十二年から毎年科學研究費の補助などを受け、その成果の一部は毎年の研究として講述され、演習としても隨時なされている。教授の村落調査法はその著『村落調査細目』に収録されているが、純粹に社會學的事であることと、極めて包括的・組織的かつ具體的であるとともに、著しく精密なことの二點に特色を持つてゐる。そしてその類を見ない調査細目をもつてする調査の理論、および成果は、しばしば日本社會學會大會その他で發表され、注目を浴びてゐる。因みに教授が中心となつて調査した村落は京都府をはじめ、島根・山口・岡山・廣島・高知・愛媛・宮崎・長野・岩手の諸縣に及び、他に教室員の試みた村落は全國に跨り、その大きな報告は現代日本社會の研究に貴重な資料となつてゐる。なお右の村落調査の重要項目である集團の封鎖性・開放性などは村落以外のあらゆる集團の研究にも適用され、本學社會學の特色となつてゐる。その他輿論調査所の依頼する世論調査、日本社會學會の行なう社會成層および社會移動の調査なども分擔實施

して来た。

なお池田助教は元來農村社會學に關心深く、その特殊社會學としての方法論の研究、およびわが國農村社會の實態調査に力を注ぎ、農村社會學を、農業が農村の社會的行爲・關係・集團のあり方乃至變遷を、いかに規定し特殊化しているかを究明する一特殊社會學として樹立することに努めて来た。本學來任後はジーンマルの社會學を講ずるかたわら、理論社會學一般の研究に力を注ぎ、社會學の對象である社會的現實態の構造をフォーマルとインフォーマルとの兩側面に分ち、おのおのの構造と機能、およびとくに兩側面の連關係絡とダイナミックな關係過程を重視し、これらの分析を企圖している。

白井教授は、戦後も引き続き日本社會學會理事であつたが、二十九年にはその第三代會長に就任。またこれよりさき二十五年には國際社會學會(I.S.S.)の正會員に推され、二十七年トルコのイスタンブール大學における、その第十五次大會にわが國を代表して參加し、研究報告をなすとともに、部會の司會をも勤めた。その他昭和二十五年日本社會學會の支部として新しく設立された「關西社會學會」でも、創立以來昨年までその代表として會務を處理し、また二十八年十月には同志社大學小松堅太郎教授とともに、「理論社會學會」を設立して委員となり、わが國における理論社會學の向上發展に努めている。なお同會は三十年六月その名稱のみを「關西理論社會學研究會」と改め活動を續けている。なお昭和三十年一月には英國社會學界の香宿であるモリス・ギンスバーク博士が來學し、本學部主催の公開講演會や關西社會學會の同博士を迎える臨時大會などが催されたが、いずれも盛會で、英國社會學界と交流する好機會が與えられた。

戦後この期の卒業生は、舊制一一三名、新制三〇名で、この數は本講座専攻生が著しく増加したことを示している。卒業論文の傾向は一般的にやはり具體的な社會形象を取り扱つた論文が依然多いが、他面從來ほとんどみられなかつた實態調査、とくにわが國村落の實態調査に基く論文が増加し、家族・世論・階層・宗教社會學、およびア

メリカ・ロシアに關する社會學的研究がこれについてよく採り上げられている。このうち村落に關するものは、日本村落を概観したもの、村落の封鎖性と開放性、村落における生活の共同・異質化・上下關係などを扱つたものが三〇篇近くに及び、その大部分は上記調査細目に準據した實態調査に基くものである。以上今日までの卒業生總數

は二七四名に達し、教育界・新聞界・實業界・官廳その他多方面において活躍している。



昭和三十一年 社會學の實態調査 (昭和三十二年)
上野内河木村 上野内河木村における

つぎに本講座と不可分の「京都大學社會學研究會」は、明治四十二年四月「京都大學社會學會」の名稱で、米田教授指導のもとに發足し、當初は教室における純理の研鑽に對して政策に對する攻究を主目的とし、谷本教授らの講讀もあつた。のち次第に政策の色彩を失ない、社會學全般にわたる自由な討論研究の場となつた。大正三年の京都哲學會創立後、各學會の組織に變更があり、本會も「京都大學社會學讀書會」と改め、専攻生のほか他學科の學生も集り、米田教授宅などで毎月例會を開催し、學生および卒業生の研究發表について活潑に討論されたが、その論題はたとえば大正十年前後には社會學の方法論または純粹に基礎理論に關するものが多かつた。大正十四年米田教授退官後も、専任指導教官を缺きながら活潑に続けられ、昭和五年度のごときは十二回の例會が開かれ、會員の研究意欲の旺盛さを示している。この間には學生のほか教官・學外講師の研究發表も行われたが、おもにドイツ社會學者の學說の研究を通して、社會學の基礎理論を究明しようとした。ついで昭和七年以後は、臼井助教を中心に従來のごとく続けられたが、全體として臼井助教の方針に基き、學外社會學者の研究發表を聴く機會が多くなり、學生の

研究發表と相半ばする状態であつた。戦時中も少數の教官・卒業生・専攻生が協力して會を維持し續けたが、ついに十九・二十年度は例會もなく、會の機能が停止された。この間、昭和十七年ごろから學生の研究發表はもつぱら演習において討論されるようになり、以後讀書會は、學外の社會學者や教官または卒業生の研究發表を聴き、これを中心として討論を行なう場となつた。戦後二十一年十一月讀書會は再開されたが、ただちに活潑な活動はなし得ず、二十四年ごろまでは毎年二、三回の例會を開く程度であつた。二十五年に至り、讀書會がもはや學生の發表を含まない研究發表會と變つたことや、また對外的關係などから、その名稱を「社會學研究會」と改めて再發足するようになったが、そのころから社會情勢の好轉とともに例會も頻繁に開かれるようになり、戦前の盛況に復歸しつつ今日に及び、最近は英國領事館ジファード情報官から「英國に於ける家族生活」なる講演を聴いた。

なお昭和二十七年十月には本講座出身の杉之原壽一講師らの少壯學徒が中心となり、臼井教授の指導のもとに同人雜誌『ソシオロジ』が發刊された。最初は同人數も三三名に過ぎなかつたが、その後は本學出身者以外の人びとも加え、關西一圓の少壯社會學徒をほとんど網羅して、現在會員數は約一二〇名に及んでいる。『ソシオロジ』はすでに第十三號を發刊、その編集には池田助教以下が當つているが、西日本唯一の社會學關係の學術雜誌として、社會學の向上發展に寄與している。

また臼井教授は本學教育學部の創設に當つて、その創設委員、ついで同學部の兼任教授として教育社會學を擔當し、現在は授業擔當となつているが、たまたま昭和二十六年日本教育社會學會第二回大會が京都に開催されたのを機として、臼井教授が中心となり、「近畿教育社會學會」を設立した。同會は二十六年九月第一回研究會を開催してから、現在まで毎年三・四回の研究會を開き、教育社會學に關する自由な討議と斯學の普及發展に貢獻している。會員は教育學と社會學の専攻者からなり、約五〇名である。